

日本慈濟世界

日本ツーチーセカイ

2021年10月10日出版

第 169 期

慈濟日本分會30周年專刊 上



所謂「菩薩所緣，緣苦衆生」，貧窮困苦如海地，幸有慈濟的人間菩薩不捨苦難，守護當地。從二十三年前襲擊中美洲的風災起，我們就對海地展開關懷和援助，曾經動員志工募集衣服，仔細縫補、清洗、

又接連遭逢強震、颶風災情，死傷嚴重，許多人房屋倒塌，無家可歸，受災的處境堪憐。幸好有美國、臺灣與本土的慈濟人合力支援，進入災區勘察、訪視，為災民發放急難

我很有福，一聲呼喚就有衆多弟子響應。期待人人不浪費時間，讓善的種子深植在意識，共同一心延續慈濟情。資深的人分享生命歷史，教育下一代接棒，將愛帶動起來，如此以善傳家、以善傳世，不斷拉長情、擴大愛，這個世間才會有希望。



人生來來去去，接續的因緣、生命的長短都無法預料；若能善用每分每秒的平安，發大願為人間付出，才是真壽命。



以善傳家、以善傳世

燙平，摺疊好再整整齊齊地裝箱，運到當地送給需要的人。

物資等等，規畫如何幫助他們度過苦難。

慈濟從五十五年前，呼籲大家日存五毛錢的「竹筒歲月」開始，點滴會合、累積人心的心力，至今行善足跡已遍布全球一百多個國家地區。在我會客室的桌上有一張全球地圖，每當有國家發生災難，或慈濟進行慈善援助，就有人在地圖上指出位置，讓我能理解。所以我天天都走在這樣的地圖上。

海地天災頻繁，社會動盪，志業不易成長；但是一些慈濟人不放棄，懷抱志業精神，冒著生命危險以愛膚慰。就像美國的陳健居士，數年來往返付出，與鄉親建立了感情；或如本土志工丹尼爾，即使受槍傷也不退失道心；還有信奉天主的如濟神父，沒有宗教間的隔閡，承擔起慈濟的勸募與發放，每天照顧衆多孩子的溫飽。他們都是慈濟在海地的種子，能帶動、造福人群。

很心疼海地，究竟何時才能看見環境有所改善？因緣業力讓人生在這個國度，為了生存而耐受諸多苦難；平安生活的我們，怎能不有所覺悟和警惕？人生無常，很多事情無法預知，享福若未再造福，福盡業就來。我們到底有多大的福？多少的日子可以這樣享福呢？時光易過，我們要見苦知福再造福，好好地守護我們的福。

《日程表》

2021年

十一月 November

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
	1 代々木炊き出し配布 9:30集合	2	3 草月流花道 10:30-12:00	4 写経 13:30-15:30 手話 10:30-12:30	5	6
7 中国語子供クラス 中国語大人クラス ボランティア研修 ボランティア研修	8 中国語子供クラス 中国語大人クラス ボランティア研修 ボランティア研修	9	10 (読) 仏典系列 13:30-15:30	11	12	13 静思花道 13:30-15:30
14 中国語子供クラス 中国語大人クラス 大阪西成区炊き出し 夜回り	15 代々木炊き出し配布 9:30集合	16	17 草月流花道 10:30-12:00 (読) 仏典系列 13:30-15:30	18 写経 13:30-15:30	19	20 ボランティア研修 (日本語) 10:00-15:00
21 ボランティア研修 ボランティア研修	22 うらら障礙者昼食交流 10:00-13:00	23	24 (読) 仏典系列 13:30-15:30	25	26 (読経)《地藏経》 20:15-22:00	27 静思花道 13:30-15:30 (読経)《地藏経》 20:15-22:00 夜回り 17:30-
28 (読経)《薬師経》 (読経)《薬師経》 中国語子供クラス 中国語大人クラス (読経)《地藏経》	29 中国語子供クラス 中国語大人クラス (読経)《地藏経》	30				

十二月 December

◎東京23区 ◎関西地区 ◎群馬地区 ◎山梨地区

日	月	火	水	木	金	土
			1 草月流花道 10:30-12:00	2 写経 13:30-15:30 手話 10:30-12:30	3	4
5 ボランティア研修 ボランティア研修 中国語子供クラス 中国語大人クラス	6 代々木炊き出し配布 9:30集合	7	8 (読) 仏典系列 13:30-15:30	9	10	11
12 中国語子供クラス 大阪西成区炊き出し 夜回り	13	14	15 草月流花道 10:30-12:00 (読) 仏典系列 13:30-15:30	16 写経 13:30-15:30	17	18 ボランティア研修 (日本語) 10:00-15:00
19 ボランティア研修 ボランティア研修	20 代々木炊き出し配布 9:30集合	21	22 (読) 仏典系列 13:30-15:30	23	24 (読経)《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00	25 (読経)《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00 夜回り 17:30-
26 (読経)《慈悲三昧水懺》 20:15-22:00	27 (読経)《薬師経》 10:30-12:30 (読経)《薬師経》 10:30-12:30 うらら障礙者昼食交流 10:00-13:00	28	29 (読) 仏典系列 13:30-15:30	30	31	

※上記表は変更になる場合がありますので、参加する前に必ず事務局までお問い合わせ下さい。(読)→読書会

善を代々引き継ぎ、 善を広く世界に伝えていきましよう

訳 / 金子昭

人生にはさまざまなことが起こります。因縁が続いて現れたりすることや、命が長かったり短かったりすることなどは、前もって予測ができるものではありません。もし毎分毎秒の平和な心を善用し、世の人々のために力を尽すという大きな願を立てれば、これこそが真実の寿命であると言えるでしょう。

慈濟は五十五年前から、人々に呼び掛けて、毎日五銭ずつ貯金をする「竹筒歲月」を始めました。人々が次第に集い、皆の心の力が積み重なった結果、今では善行の足跡が世界中の百以上の国や地域に拡大いたしました。私の応接室のテーブルの上には世界地図が広げられています。災害の発生する国が出ることに、あるいはまた慈濟が慈善活動を展開するごとに、地図の上でその場所を示してもらえるので、私もそこがど

こなのか分かります。それゆえ、私はこうして地図の上を毎日行き来しているのです。

「菩薩に縁あり、それは苦しみの衆生との縁である」と言われます。ハイチのように貧困にあえぐ国にも、幸いなことに慈濟の人間菩薩がいて、苦難を見捨てることなく、現地の人々を守ってくれています。二十三年前に中米を襲った風水害の日以来、私たちはハイチで住民へのケアと支援を展開してきました。ボランティアを動員して衣類を募集したことがありました。その時は、綻びがあればそれをつくろい、またきれいに洗ってアイロンをかけ、折りたたんだ上で、丁寧にしっかりと箱詰めし、現地に送って必要な人々にお渡ししました。

ハイチでは災害が頻発し、社会も不安定なため、ボランティアがなか

なか成長しにくいところがあります。けれども、決してあきらめず、志業の精神を胸に抱いて、たとえ命の危険をおかしてでも、愛をもって人々を慰め励ましている慈濟人たちがいます。アメリカに陳健さんという方がいます。陳さんは数年前からアメリカとハイチを往復して献身的に努めていますので、現地の人々と友愛の情を築くことができました。また、現地ボランティアのダニエルさんのように、銃で撃たれて怪我をしても、道を求める心を失うことのない人もいます。さらには、カトリックのブッキ神父のように、宗教間の隔たりなく、慈濟の募金活動や物資配布を引き受け、多くの子供たちに衣食が足りるようにと、日々ケアに努めている人もいます。彼らは皆慈濟がハイチに播いた種であり、人々を導いて幸せをもたらしています。

現地の人々の暮らしは貧しく苦しいのですが、今年八月に強い地震、ハリケーンと連続して災害に見舞われました。深刻な数の死傷者が出ました。また、家屋が倒壊して、帰るべき家を失った人々も数多くいて、被災状況は見るに忍びないものがあります。幸いにしてアメリカ、台湾及びハイチ本土の慈濟人はお互いに協力しあい、被災地に赴いて状況を視察し、被災者の為に緊急支援物資を配布するにいたしました。そして、彼らがこの苦難の状況を乗り越えるために、どのように支援していったらよいのかを話し合ったのです。

ハイチの状況には心が痛みます。いったいいつになれば環境が改善されるのを見ることができでしょうか。因縁による業の力によって、人はこの国に生まれ、生きるために多くの苦難を耐えることができるのでしょうか。平和に暮らしている私たちは、どうして自覚や用心を持たないということがあり得るのでしょうか。人生は無常です。多くの事柄は予知することができません。幸せを

享受していても、もし新たに幸せを作り出さないならば、幸せはそれで尽きてしまい、因縁の業が現れてきます。私たちは、どのくらい幸せを持っているでしょうか。どのくらいの日々を、このように幸せを享受できるでしょうか。時間は容易に過ぎ去っていきます。私たちは苦の現場を見て、幸せを知り、幸せを新たに

作り、しっかりと私たちの幸せを守っていかなくてはなりません。

私は幸せです。一声呼びかければ、大勢の弟子たちがそれに応じてくれるからです。皆さまには、時間を無駄遣いすることなく、善の種を深く意識を植え付け、心を一つにして慈濟の心を伸ばしてほしいと切に願っています。年配の慈濟人たちは、自らの人生の歴史を語り、次代へと引き継ぐ教育を行っています。愛を発動させて、このように善を代々引き継ぎ、また善を広く世界へと伝え、そしてたえず愛を引き継ぎ、愛を広めていってこそ、この世界に希望が見えてくるものでありましよう。

静思



■ 2021年8月14日に強い地震、ハリケーンと連続して災害に見舞われました。アメリカ、台湾及びハイチ本土の慈濟人は、被災者のために緊急支援物資を配布しました。
写真 / 慈濟本部提供



《上記以外のご協力の方にも感謝致します》

住所：〒169-0072
東京都新宿区大久保 1-2-16

電話：03-3203-5651

FAX：03-3203-5674

E-MAIL：tzuchi@tzuchi.jp

郵便口座：00190-4-753352

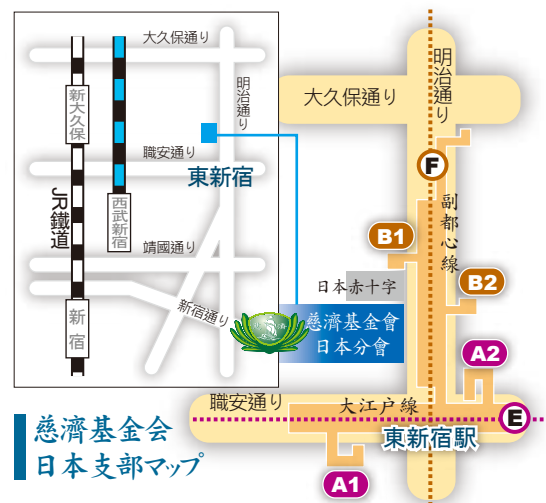
口座名義：仏教慈濟基金會
ブツキョウジサイキンカイ

時間：毎日 9:00 - 17:00

HP：http://tw.tzuchi.org/jp (日本)

HP：http://www.tzuchi.org.tw (台湾)

いつも「日本慈濟世界」にご支援頂きありがとうございます。
これからもご協力下さいますよう、
宜しくお願い致します。



【日本慈濟世界】
ホームページ



表紙写真：

走過三十年的慈濟日本分會，足跡遍布日本各地，從小型茶會、災難現場，從物資的援助、煮熟食、見舞金發放，結集了全球慈濟人的愛心，許多的感動與感恩回憶在其中。
在第二十周年發生的 3.11 大震災，慈濟人用愛突破重重困難，踏過斷垣殘壁，膚慰無數的鄉親。感動，讓我們愛心有了出口；感恩，無所求的付出，豐富了我們的生命。攝影 / 蕭耀華

上人開示 (證嚴法師の教え)

01 以善傳家 以善傳世

釋證嚴

02 善を代々引き継ぎ 善を広く

世界に伝えていきましよう

金子昭

訳

日本分會 30 周年専刊 上

縁起篇 (縁起の巻)

06 分會足跡三十・大事記

張秀民 陳靜慧

36 慈濟日本支部三十周年の足跡

小野雅子

訳

09 分會足跡三十・縁起故事

張秀民

40 慈濟日本支部三十周年の物語

李曉萍

訳

10 執行團隊回首一念心

張秀民 許麗香 陳靜慧

41 執行チーム 心の中を振り返って

真鍋誠

訳

人文篇 (人文の巻)

12 人文教室的縁起與回首

陳靜慧

44 人文教室の縁起とふりかえ

佐藤仁

訳

15 大愛媽媽的縁起與回首

陳雅琴

47 大愛ママの歩みと回顧

鄭文秀

訳

17 我們在這裡成長

陳詩萍

訳

日程表

表紙裏 十一、十二月行事曆

王昆京

34 山梨、群馬、關西社區近十年
76 群馬、山梨、關西地域
十数年における状況

陳靜慧

訳

社區志工篇 (地域ボランティアの巻)

26 社區志工縁起與發展

陳思道

64 地域ボランティアの始まりと發展

井田龍成

29 其他社區縁起與早期發展

張秀民 陳靜慧

64 その他のコミュニティの縁起と早期發展

真鍋誠

訳

32 南關東和氣社區近況

河村吉美

72 南關東和氣コミュニティの近況

御山凜

訳

33 北關東和氣社區近況

蘇美菁

74 北關東和氣コミュニティの近況

張靜華

訳

50 私達はここで成長する

水谷瑞芳

19 雙月刊點點滴滴

王秀寧

53 隔月刊誌の思い出

岩村益典

22 人文真善美縁起與回首

陳靜慧

58 人文真善美の縁起と振り返え

吳俞輝

24 日本分會經藏演繹回顧

黃韻璇

61 日本支部の經藏手話劇の振り返り

王珠惠

訳

日本分會足跡三十・大事記

整理／張秀民・陳靜慧

1991年
6月3日 送件設立
6月6日 接獲核准通知
6月23日 日本分會成立慶祝大會，臺灣慈濟人前來助緣
8月18日 日本分會第一顆種子謝富美受證委員法號靜聖
10月25日 首例慈善救助個案幫助韓僑返國
12月3日 成立華語正音班，於廣尾開課

1992年
3月27日 劉秀忍居士提供船橋會所
4月27日 首例長期補助個案孫女士
6月7日 一周年慶聯誼活動
8月10日 首次花蓮靜思精舍尋根
11月1日 《日本慈濟世界》雙月刊創刊
11月 宋吳卻師姊發心提供三軒茶屋會所

1993年
4月22日 首例機構定期服務，每週四於世田谷老人院進行關懷
7月22日 北海道奧尻島地震，援助災民二萬日幣
10月2日 首次參加東京中華學校國慶日義賣

1994年
4月26日 華航名古屋空難，於4月27至30日前往關懷

1995年
1月17日 阪神大地震前往勘災，並發放物資、慰問金予留學生

3月 首次與日本天主教山友會合作製做飯糰，關懷隅田川街友
9月24日 首次參加東京三鷹國際交流義賣活動，所得捐柬埔寨
11月7日 首次發放睡袋予隅田川街友

1996年
5月18日 應邀出席日本骨髓庫東京地區支援會，促成中日骨髓資料庫連線計劃
6月9日 成立慈青隊，定於每月第一個週日舉行聯誼會

1997年
12月29日 日本慈青首辦「創意團康企劃營」

1998年
9月27日 首次街頭募款，救援大陸華東水災

1999年
5月 首次舉辦快樂親子營（群馬縣觀音山）
9至10月 臺灣921地震，各地愛心與志工湧現

2000年
2月26日 首次祈福感恩會（佛所護念會高輪教會）
11月19日 首次委員培訓課程（蒲田）

2001年
6月3日 首次義診，（福井縣三國町）
12月8日 日本分會十周年慶暨新會所啓用典禮
2002年
4月 成立兒童中文班，每月上課三次
8月18日 首次舉辦掃街（新宿大久保通）

7月 首例社區環保回收點（群馬伊勢崎環保站設立）
8月17日 首次舉辦志工精進二日營
8月31日 首次舉辦親子一日營

2003年
5月8日 首次舉辦浴佛典禮，為SARS疫情響應齋戒

2004年
4月4日 正式成立快樂親子班，設組織章程招收六至十二歲親子
7月25日 協助新潟三條水患受災區整理家園
10月25日 首次大型急難救助，前往新潟中越地震災區十日町、小千谷發放物資並提供熱食

2005年
3月27日 首場《父母恩重難報經》音樂手語劇，（東京新宿文化中心）
10月18日 真善美花道教室開課

2006年
1月22日 首次自辦街友熱食發放（新宿中央公園）
6月11日 首次自辦日本分會愛心園遊會

2007年
3月18日 人文教室中文班首次舉行年度結業式暨聯誼會
5月10日 上人榮獲日本第二十四屆庭野和平獎
5月20日 慈青首次新宿掃街
7月19日 於新潟柏崎為地震災民提供熱食

2008年
7月15日 關西地區愛援川緬慈善音樂會
8月17日 首次舉辦日本分會吉祥月祈福會

2009年
1月5日 於日比谷公園「年越派遣村」為失業者提供熱食
3月2日 首次東京代代木公園街友定期熱食發放
12月19日 首次上野恩賜公園街友關懷，發放發放五百條毛毯

2010年
4月19日 首辦素食料理教室，於大久保地域中心開課
6月 首起小兒眼癌來日治療個案關懷，專案支援醫療翻譯
11月6日 慈濟日本分會大阪聯絡點正式成立

2011年
3月11日 東日本大地震引發海嘯、核災等複合性大災難。當天上人與分會視訊連線，指示祈禱、懺悔、齋戒及勸災賑災原則
3月15日 首次3・11賑災活動，前往茨城縣大洗町提供熱食二日，臺灣救援物資抵日

3月24日 前往災區岩手縣、宮城縣發放物資並勸災至27日
5月16日 首次代代木公園熱食發放時帶動街友浴佛
6月9日 首梯次見舞金，於岩手縣釜石市、陸前高田市發放至12日，其後總計十梯次前往東北二十八市町村發放
「五十億一六四二萬日幣，於受災鄉親九六九七四戶」
東日本大地震大型祈福會，於新宿文化中心舉行
8月29日 與釜石市簽訂「營養午餐與校車交通費補助」協議書

2012年
4月18日 「3・11心連心寫真靜態展」於新宿全勞濟會所舉辦

10月18日 「3・11心連心靜態展」於大阪市立綜合中心展出二日

2013年

4月13日 「3・11心連心寫真靜態展」於若手縣大船渡舉辦，並上映日語版動畫電影〈鑑真大和尚〉

6月10日 慈青前往山梨縣大月市種稻，收成稻米用於歲末福慧紅包

9月28日 首次素食料理比賽，於新宿大久保地域中心舉辦

2014年

2月7日 慈青首次前往新潟縣為長者除雪

7月27日 首次租借四谷區民中心舉辦吉祥月祈福活動

3月8日 首次街友志工柏木師兄花蓮尋根，行程至三月十日

2015年

1月11日 關西志工首次為西成區街友進行冬令發放

2月11日 第一度演繹《父母恩重難報經》（杉並區民會館）

7月15日 靜思茶道體驗班開課

9月13日 茨城縣常總水災關懷，協助居民清掃家園，並提供四天

合計一五二七份素食便當給當地市役所至18日

2016年

2月 東北鄉親自製募款箱，首次為臺灣臺南地震公開募款

4月22日 九州熊本縣地震關懷，志工三梯次賑災，於大津町

每日供應熱食至五月十四日

9月1日 正式成立靜思小築

2017年

3月31日 首次新芽助學金頒發典禮（日本分會）

4月2日 關西地區首次西成區定期街友熱食發放

5月25日 線上讀書會，每週一、週四晚上連線共修

8月25日 成立無量義經抄經班

2018年

3月13日 首次若手縣大槌町新芽助學金發放

4月 宮城縣鄉親延續物命，用舊毛線編織冬帽愛援街友

7月9日 西日本豪雨成災，關西志工前往岡山縣真備町提供

天熱食，並致贈受災中小學學童配善用服裝

2019年

8月27日 加入日本災害救援團體平臺（JOAD）

10月18日 19號颱風災害，前往丸森町發放一千件毛毯

10月20日 19號颱風災害，前往埼玉縣川越市協助清掃

11月8日 19號颱風災害，前往長野縣發放熱食

2020年

2月 新冠疫情擴散全球，各國醫療物資短缺，志工自製口罩並推動茹素

4月 防疫物資口罩等捐助東京都廳、老人院、醫院等機構

4月 關西地區首次發放新芽助學金

5月9日 因應新冠疫情首次以連線參加本會舉辦之全球線上浴佛

5月20日 本會大量防疫物資送達，送往日本各地醫院等機構

7月6日 推動線上日文薰法香，提供同步日譯

8月 各社區遍地開花讀書會，推動人間法說法、祈禱、茹素

9月12日 因應新冠疫情，首次雲端線上吉祥月活動

2021年

1月31日 首次線上祈福感恩會，多地同步連線

日本分會足跡三十緣起故事

撰文／張秀民

無量法門從一生

一九九一年五月九日成立日本分會，謝富美師姊在資格取得後於七月回台見上人，上人慈示：

日本分會的推展工作應腳踏實地，切勿好高騖遠，由克難做開始，誠正信實原則做事，盡多少本分即得多少本事，本事即是智慧。多讓僑界、留學生了解慈濟，等基礎穩固才推展會務。

一九九二年日本分會第一次回花蓮尋根，上人開示：慈濟以慈悲喜捨的佛教精神與誠正信實的慈濟精神做社會工作，要抱持克難精神，以歡喜心推展分會工作，如此才能長久。

八月十一日劉桂英、張秀民受證委員，上人慈示：慈濟是以入世的佛法，出世的精神做濟世的工作，並非以口宣傳，而是以身作則，身體力行！要實踐入世的佛法，必得先擴大心胸，縮小自己。凡事不可有計較之心，學

佛就是要學菩薩，以慈悲寬大心胸，廣結人緣。領受上人慈示，大家回來日本後，更積極辦茶會、聯誼會，並向各界募心募愛。

早期秉持上人的慈示，哪兒有苦難，就要走到哪，所以北海道奧尻島的地震也趕往關懷，九州個案也不遠千里前往，協助相隔半世紀的老兵李仙賜與台灣親人相聚。早期協助最多的還是來日旅遊突然病發或往生的個案。

一九九四年四月華航名古屋空難，志工們第一次見到那麼多大體，大家不但不害怕，更順利地完成了陪伴膚慰的任務。透過菩薩大招生，多一位慈濟人，就多一份良善力量！

早期在沒有網路、大愛台的時代，一群志工們拿著慈濟月刊、慈濟世界錄音帶、上人開示的錄影帶，到處開茶會、說慈濟，撒播菩提種子，為找尋跟上人有緣的弟子，大家都做得很歡喜。



■ 1992年日本分會志工第一次回花蓮尋根。攝影／日本分會提供

那一年，日本分會第一任執行長謝富美在陽明山上的一場車禍中奇蹟似地保住生命，因此向觀世音菩薩發願行善回饋。透過慈濟委員宋吳卻的引見，一九九〇年見了上人，向上人發願申請日本事務所許可看看。

因緣不可思議，成立日本

心、一粒種子開始的。

30

慈濟日本分會
三十周年專刊

緣起篇

執行團隊回首一念心

謝富美

整理／陳靜慧

(第一任執行長／一九九一年)

一九八〇年，回臺時家族七人遇上一場大車禍，謝富美在住院時許下心願：「如果讓我活下來，一定要做有意義的事來回報」。十年後的一九九〇年返臺探親，在菜市場賣菜的太太，介紹了慈濟，也給了她簡介和資



■ 第一任執行長謝富美2008年為川緬震災於新宿街頭募款。攝影／慈涓

料，回家後她用心細讀，深深感動。他日向公公提起，沒想到公公說：公司裡有位宋篤志先生就是慈濟人。隨即安排她去拜訪證嚴上人。回想那一日：「第一次見到師父時，師父說每個從日本來的人，來看了我都說會想想，要怎麼幫忙師父，會去問問如何申請（日本分會），但結果都是有去無回。還願的機會終於來了，她決定要幫忙眼前這位瘦瘦的師父。」

回到日本後，穿梭在高樓林立的大都會街上，東奔西走三個多月後，沒想到登記許可真的核可了。「申請下來後我打電話告訴師父，沒想到師父對著我說：申請下來了，就要開始做啊！」

謝富美嚇一跳，「我一個家庭主婦，什麼都不懂，我連慈濟

兩個字都不知道！」從什麼都不懂，在不可思議的因緣中開啓了慈悲路，走過三十年，始終如一日不忘佛心師志！目前已回臺定居的她，依然是慈濟志工，從青絲做到白髮，是日本分會永遠的大家長。

張秀民

撰文／張秀民

(第二任執行長／二〇〇二年)

一九九一年踏上慈濟大門是一個偶然，也是學佛生涯的轉折，這之前修的是淨土法門。但是證嚴上人「普天三無」與「為佛教為眾生」的精神令我感動，自此走入慈濟菩薩道。

當時住群馬，無法常在分會，要承擔重責是惶恐的，幸而有擅長電腦文書及具策劃能力又敢向前衝的許麗香，以及訪視用心、熱心募會員的林素子二人承擔副執行長。當時新會所剛啓用，首要的任務就是努力在日本耕耘教育與人文。



■ 第二任執行長張秀民，致贈「福慧紅包」。攝影／日本分會提供

那段還住群馬的日子，週一至週四陪伴群馬慈濟人成長，週末到東京參加分會各活動。

回想起來，一路上面對的最大挑戰是東日本大地震的賑災，幸有志工陳金發與陳思道的先遣探路，加上臺日兩地志工無悔的付出，終能完成十次東北災區的見舞金發放。

回首三十年，依然滿滿的感恩，感恩上人、家人及所有的慈濟伙伴！

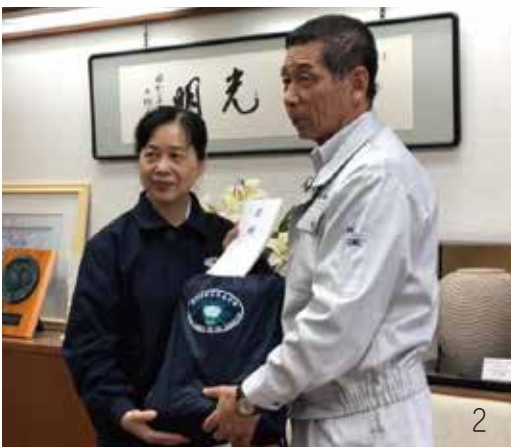
許麗香

撰文／許麗香

(第三任執行長／二〇一四年)

日本分會成立的第八年，一九九八年跟著赴日工作的先生，再度回到日本，當時的日本分會設在公寓內，小小的空間，有十來位委員，人雖少卻溫馨。當年剛從台灣受證成為委員，一心只想如何將上人的慈悲延伸，讓更多人認識慈濟。

一路走過來，有過許多的歡笑、悲傷與淚水。「落紅不是無情物，化作春泥更護花。」二



十多個年頭過後，是淡忘，又或是智慧提升，已經記不得為哪樁事哀傷，只知不管為他人或是為自己，受到委屈都可以讓淚水成串，然而歡笑的日子是集合許多的笑聲一起爆發的。

走過二十三個年頭，內心依舊澎湃湧湧，仍堅持著「天天做慈濟」。當年因為上人「要挑天下菜籃」的決心讓我感動，決定跟隨上人。原本以為只做善事就足夠，卻走進了浩瀚的佛法中。從以為佛法只是誦誦經，走入了無量義，認識了法華，方知

修行要六度萬行，深入經藏才能智慧如海，需要安忍力才能走過菩提大道。

午夜夢迴，常常自忖，我的愛是否無缺，是否完整，是否有依教奉行！期待能在離著心靈故鄉千萬里遠的東瀛，將大家的心凝聚起來，用愛擋一切的災難，讓人人能轉動生命的價值，成長慧命，與上人印心。

陳金發

撰文／張秀民

(日本分會督導／二〇〇二年)

與日本緣份很深的陳金發，在日本設有公司並置房產。一九九六年到三軒茶屋首次分享，不捨四十五位會眾擠在三軒茶屋小小的空間，協助找到現在新宿大久保的會所。

還未認識慈濟時，他是酒國豪傑，妻子鄧淑英希望他跪著

■ 1 日本分會督導陳金發，於熊本震災時，前往災區慰問災民。攝影／慈涓

■ 2 第三任執行長許麗香，於丸森町水災賑時，送上環保毛毯。攝影／呂瑩瑩

將丈母娘的遺產捐給證嚴上人，讓他很不以為然，決定有機會一定要去慈濟探個虛實，沒想到就此皈依，真的捧著巨款捐給慈濟。這樣一位大護法，從此戒酒，走入慈濟國際賑災。

悲心啓發，從此成為國際賑災的大柱，行上人要走的路，也受上人所託成為日本分會督導。之後，帶領日本分會參與各個大小災難的賑災。

3. 11大地震時，奔走東北災區，那一年，有九個月在日本。金發時常透過越洋電話，或是親自來到日本關懷會務發展，還決定把妻子「捐給日本分會」。從此，淑英長時間在日本陪伴日本慈濟人，協助推動親子班、茶道體驗班與花道教室，為日本分會的人文打下基礎。她的溫柔謙卑與誠懇，讓許多日本慈濟家人感激不已。

對日本分會而言，真的非常感恩有這麼一位充滿愛的能量與熱度的督導，更感恩上人的智慧成全！

人文教室篇 1

人文教室的 緣起與回首

撰文 / 陳靜慧

日本分會於 2006 年 1 月秉承證嚴上人以品德教育、生活教育、全人教育為目標的理念，合併語言教學的中文班，與人文教學的親子班，改稱為「人文教室」，配合日本學制每年春季、秋季招收新生入學沿革至今。

人文的起步 快樂親子班

二〇〇七年三月首次舉行年度結業式暨聯誼會，肯定並鼓勵學生們一年來的勤學，同時家長、師生與志工四向聯誼，並推選出四個班的家長代表協助平日之聯絡事項。

人文教室起步之時，其實已經累積多年的教學經驗。最早在一九九一年就成立華語正音班。一九九九年志工經三個月籌畫，於群馬首舉次舉辦「快樂親子靜思營」，內容有手語、短劇、靜思語、中文、環保等。二〇〇〇年於山梨成立親子班。

二〇〇二年日本分會新會所啟用，九層樓的建築，是結集無數愛心的道場。這年，重新開設中文班，並試辦親子二日營。副執行長許麗香專程回到臺灣帶回許多資料，二〇〇三年隨先生來日的陳靜慧剛加入志工，承擔

起年度課程的設計。「因為畢業自師範學校，對教育就是有使命感！那時還不懂得慈濟，還有很多的參考資料，再加上不斷從網路上查閱慈濟海外學校的訊息，從中自我學習」靜慧說。

執行長張秀民籌備會議中說明：「要以慈濟人文精神來教導孩子，期待學員成為身心健康、自利利他的小菩薩。」自此，這座落於大東京都區一角的日本分會，有了新的使命與夢想，志工們既歡喜又興奮。二〇〇四年組織章程確立，每月一次以人文教育為主軸的快樂親子班正式招生，正副執行長擔任班主任。

每月課程有不同主題：例如七月「慈悲」，首次跳蚤市場課程，教導惜物與布施，活動最後，在燭光環繞中，大人、小孩依序到前方把這一日所得捐出，硬幣匯入功德海的聲音，是愛的響板。十一月主題「行善」，首

次在新宿御苑舉辦戶外教學分組攻站遊戲。

二〇〇五年二月，首次為南亞大海嘯街頭募款。七月，首次與茨城縣華僑總會舉辦青少年夏令營。八月首次前往機構交流。十一月首次參加義賣會出攤。快樂親子班志工，一路摸索創新，要以父母心來愛天下的孩子。

專業教師陣 春風又化雨

每月一次的親子班以人文教學與親子活動為主軸，二〇〇六年與中文班合併後，改為每週日上課，課程也改以中文教學為主，人文課程為輔。

二〇〇七年河村吉美接任課務設計，隨著中文熱興起，二〇〇八年邀約研究華語教學的李彩蓉老師加入。河村說：「我和李老師透過網路，也走訪華人餐館，還到附近的社區投信箱，擴大宣傳與招生。」成果見效，學生由原先二十多名增至六十多

名，班級也增加至兒童班十班，成人班三班，同時邀請多位華語教師帶班。

人文課程方面規劃非上課時段之象棋、書法課程等；靜思語時段，實施混齡教學。三月首次舉辦教學參觀日與教學說明會。九月，由來自臺灣的教聯會的林美雲老師近半年策劃指導，演出靜思語布板戲「孝順的小豬」，成果發表會上親師生一百六十餘人，表演手語、歌唱、靜思語背誦、話劇等。

二〇〇九年學生持續增加，下午時段提供為「成語故事、中國結、茶道禮儀、象棋、課輔、日文」等才藝課程，供學生或家長課後選修。五月時前往埼玉縣首次舉辦戶外親子三日營活動，藉田野炊、大地遊戲、野外尋寶、星座觀察等方式寓教於樂。十月起，靜思語教學改為全體兒童班共同上課方式實施。

二〇一〇年，畢業自師範學院的陳詩萍老師加入陣容，參與華語文及靜思語共同教學。詩



■ 1 三軒茶屋會所，於 1994 年 4 月，開辦「慈暉華語正音班」，由劉秀菊老師（中）指導。攝影 / 日本分會提供

■ 2 非正規時段之人文課程，供學員們課後選修，老師指導象棋。攝影 / 王秀寧

■ 3 林美雲老師策畫靜思語布板戲「孝順的小豬」。
攝影 / 日本分會提供

■ 4 鄒淑英（中）開辦「真善美花道」。攝影 / 日本分會提供

■ 5 中文班學員們愛心義賣。攝影 / 日本分會提供



■ 1 全力支援各項活動的大愛媽媽。攝影 / 陳文絲

■ 2 教導學員們插花的大愛媽媽藤本裕子（左一）。攝影 / 陳文絲

人文教室篇 2

大愛媽媽的緣起與回首

整理 / 陳雅琴

每逢上課日時，就會看到這一群在不同崗位上克盡職守的志工，是教室外老師的好幫手，更是老師、學生及家長三方的橋樑。這一群中文班志工，其正式名稱稱為「大愛媽媽」。



- 1 二〇〇九年起，陳靜慧老師（左二）教導靜思語。
- 2 二〇一〇年，陳詩萍老師（左一）加入陣容，參與華語文及靜思語共同教學。
- 3 入口處，每週由大愛媽媽把關的「靜思語密語通關」。

萍因為九二一的因緣認識慈濟，之後成為教聯會老師，結婚後來日定居東京。加入人文教室志工後，一起承擔教務規劃。

通關與認證 等候在門口

二〇一二年，再度隨先生調職回到日本的陳靜慧回歸團隊，持續推動行政、教學各司其職，建立專業分工、理念合心的教育團隊。十月開始，每月規劃一系列「認識慈濟」的課程，邀

請志工近距離分享。志工們以過來者身分，常提醒家長們，讓孩子多說中文、多做家事、多回臺灣、多來慈濟，在人與人之間學習人文禮儀。

二〇一三年五月起，課前實施「靜思語密語通關」，自此志工們每個上課日等在分會玄關，從孩子進入大門，就以愛的密語來互動。課後推動「朗讀認證」，由志工、家長擔任認證老師，小學員們下課後輪流排隊大聲讀誦課文，至今仍是最溫馨動人的畫面。

二〇一五年，因日本3.11

1 1 因緣受證的志工陳雅琴加入行政與活動規劃至今。二〇一六年，策劃走訪美術館，及親近田

日本分會人文教室三十年裏，物換星移，但唯一不變的就是中文班的志工群，這也是慈濟人文教室中文班，有別於其他的中文班不同之處。

大愛媽媽 志工搖籃

證嚴上人說：「大愛媽媽，就是用媽媽心，去照顧別人的孩子，用菩薩的智慧教導自己的孩子」。二〇〇四年日本分會開設親子班招收六至十二歲親子，隨著家人而來的學前幼兒，由志工劉桂英規劃幼幼班課程，偕同王昆京及數位志工，共同守護這一群利用假日努力學習雙親母語的未來主人翁，此為「大愛媽媽」的前身。

二〇〇五年志工鄒淑英開設慈濟真善美花道班，時間長達五年，課程中除了花道以外，更分享慈濟志業的四大八法，尤其「教育」，鼓勵了花道班學員於課後紛紛投入不同的志工活動中，

園農作挖番薯的戶外課程。平日不論是文書製作、名冊管理、教學支援、教材管理等，或是帶動家長手製牛奶盒存錢筒響應竹筒歲月，都全力以赴。十多年來有許多志工的無私付出與愛心灌溉，成就了這塊教育的花園。「我的孩子轉變很大，開始在家裡會主動說中文」「我住得遠，來到這裡就是為了能讓孩子接受慈濟的禮儀與人文。」慈濟用心和家長互動與溝通，讓我們得到心靈的充實，我們也希望有機會可以付出」每句話都是無上的禮物。

孩子們！只願我們是一群守候幼苗的園丁。每次相會我們都已選好了種苗，名為「親恩」；或是「慈悲」，或是「布施」等等不一。

你們是一隻隻小小彩蝶，穿破天輕輕降落這裡。我們別無所求，只是要持續的等候你們的來到，一起聞聞這土地的芬芳，我們已感到極大的幸福！

其中藤本裕子及潘秀鳳、郭惠珍等，於二〇〇九年加入中文班「大愛媽媽」志工的行列。

從二〇〇九年至二〇一二年，人文教室擴大招生，由於教學型態多元化，志工人數增加不及擴班速度，邀約學生家長與慈濟志工組成愛心爸媽，除了負責學童安全、佈置教室及場地、也協助老師課後輔導，成為老師、學生與家長間的溝通橋樑。

藤本裕子及其團隊為中文班第一代的「大愛媽媽」。她用心規劃上課日的值班表及各種活動，如讀書會、花道課及手語課等，帶領著家長及志工，一同在中文班裏與孩子共成長，有些家長更因受到感動，而成為慈濟人。

志工潘秀鳳從早期的教室打掃、午齋備餐，到二〇一三年開始的上課前的靜思語通關密語的認證，這是她最喜愛的工作。即使有病痛，但很感恩有這樣的機會，所以至今仍堅守崗位。



30
慈濟日本分會
三十周年專刊

人文篇



2



1



4



3

■ 2 林偉權發願做有關人文教育的事。
攝影 / 慈涓

■ 4 陳靜慧行政與教學都是一絕。
攝影 / 陳文絲

■ 1 河村吉美教學又兼課務與行政。
攝影 / 慈涓

■ 3 羅文伶鼓勵孩子勇於表達。
攝影 / 陳文絲

人文教室 3

我們在這裡 成長

整理 / 陳詩萍

在人文教室裡，不只孩子，許多志工也在這裡成長。這裡有八位志工，因為人文教室，他們的生命更寬廣、更豐富了…

經常駐守在幼稚園教室的志工郭惠珍說，小朋友有時也難免會有一些突發狀況，或者是其他人與事的問題發生，所以都是考驗我們的應變能力，更重要的是大愛媽媽一定要有愛心和耐心，否則難以勝任。由於現代社會型態的複雜，要面對來自各種不同家庭的孩子，教育顯得格外的不容易。

大愛媽媽除了協力收費、家長諮詢、協助老師安撫學生的情緒，還有上課前的孩子的通關、中文達人認證，下課後的教室清掃和教室外的守護，陪伴孩子等待家長等等，看似細微的工作，卻是人文教室不可缺的要角。

志工王昆京從二〇〇四年

開始，歷經無數個寒暑假，直到二〇一二年年末從職場上退休，返台探親時，將棒子交給志工劉桂英，請她暫代，這一替代就到現在近十年了。從暫代到全力支援，因這個機會而再續前緣。

因工作的關係，只有星期六日方有時間，為此就獨鍾星期日的「人文教室」，九年來每週日如同上班一樣的時間出門。上課前一樓的通關，家長的詢問，還有為鼓勵學生多說中文的達人認證，下課後的教室清掃等都親力親為。每每看到學子們的成長，不論是身高或學習，就覺欣慰！「來中文班做大愛媽媽成為生活的一部分，就像看自己的孫子孫女一樣開心。」桂英說。



1



2



3

愛的見證 長長久久

志工林瑪莉現在是輔導處大愛媽媽窗口，至今近十年了，一直堅守在七樓的教室，即使有段時間因工作必須住在北海道，還是會在上課前一天從北海道趕回東京。何嘉鈴凡事以人文教室為優先，雖加入的比較晚，但每逢上課日一定提早到將認證通關所需要的文具準備好，更在七樓幼稚園裏協助老師及陪伴守護學生。

人文教室因應不同階段的需求變化，大愛媽媽團隊也不斷的調整，希望能與老師、分會做最完美的配合，讓家長安心，也讓孩子有一個學習中文的好環境。

境。當有戶外教學時，更是全程不可或缺的好幫手！

今年二〇二二年日本分會三十周年，人文教室也是三十周年，回首當年滿滿回憶，劉桂英當年與王昆京一起帶著孫女來學中文，一轉眼小女孩都已是大學生了。當年的這一群婆婆媽媽志工，從青絲到白頭，可能動作慢了，體力也不如從前了，但那份心卻從來沒有隨著歲月而改變，看到了當年的家長成為慈濟隊伍中的一員，甚至成為老師，更高興的是畢業的學生，利用假日再回到教室，加入大愛媽媽的行列，那是一份愛的傳承，也是愛的見證。

照片提供

教育不能等」、「有愛就無礙」。

羅文伶 受證：二〇一五年

二〇一二年三月重回久違二十多年的日本分會，文伶就決定「有人邀約我、需要我，我必竭盡心力使命必達」。

一直以來，文伶對於志業的承擔始終保持著「哪裡需要就去哪裡」。接任人文教室教師與行政工作後，「如何讓孩子喜歡來上課呢？」「老師的我又能給來上課的孩子什麼呢？」「人文課程、華語教學這兩項如何二合一呢？」想想想！不如起而行。只要跨出第一步一切就不難！對的事做就對了！文伶也期許自己一直走在慈濟的菩薩道上，把握每一個好因緣。

林偉權 受證：二〇一六年

與慈濟有深厚緣分的偉權，受證慈誠後，發願做人文教育志業相關的事。當時深受土耳其的滿納海學校一事感動，覺得孩子

■ 1 大愛媽媽郭惠珍協助孩子們學習。
攝影 / 慈涓

■ 2 大愛媽媽林瑪莉與孩子們一起唱遊。
攝影 / 日本分會提供

■ 3 大愛媽媽大塚美月，協助發給中文班學員結緣品。攝影 / 陳靜慧



是很單純的，給什麼樣的環境就會有相對的吸收和成長，因此受證後更堅定在兒童中文班付出。偉權藉由教學的過程來琢磨自己的心性，並持續的學習。

黃韻璇 受證：二〇一五年

身為慈濟家庭的第三代，大學開始加入慈青，之後參與台北萬華區大愛媽媽一起入校園帶靜思語教學。韻璇能跟日本人文教室結緣是因為靜慧的引薦，成為靜思語小組的一員。

二〇一九年成為人文教室教師的韻璇，很喜歡「不要小看自己，因為人有無限的可能」這句靜思語，常常用來勉勵自己，



也希望傳遞給自己的孩子跟學生們。也期望在孩子們身上撒下的愛與善的種子，並讓善一直循環。

楊紅衛 受證：二〇一七年

在女兒小學二年級的暑假前，因為想給孩子學點中文的念頭，而認識了慈濟。「不只教中文也教人文」是紅衛對人文教室的第一印象，之後參加當年舉辦的親子三日營，更是堅定了要讓孩子繼續留在這個團體學習。

一年後雖然因為鄰居大火而受牽連，但那時受到許多熱心人士和慈濟志工的幫助，讓紅衛暗暗發誓，有機會也要去幫助



他人。多年過去，紅衛真的成為了慈濟人，也將愛傳遞給許多的人。

王曉紅與魏國斌

受證：二〇一七年、二〇一六年

因為想讓孩子學中文，曉紅與國斌經紅衛的接引來到了慈濟人文教室，沒想到孩子一到慈濟就不感陌生，並且很喜歡。

每星期日陪讀，孩子上課時間夫妻倆開始參加慈濟的各種活動，課程中資深志工的分享和影片帶來很深的震撼。在上人教導下，體會了要常懷感恩心，走入人群。曉紅和國斌希望把握當下的好因緣，在慈濟這個大家庭

雙月刊點點滴滴

慈濟日本分會今年創立三十週年，日本慈濟世界（雙月刊）也走過二十九個年頭，邁入而立之年。

撰文／王秀寧



■ 麥金塔電腦。

一九九一年日本分會創立，隔年（一九九二）十一月由證嚴上人親自題字的「日本慈濟世界」第一期正式出刊。本著希望讓在地會員了解更多日本慈濟事，以及誠正信實刊載徵信名單（捐款人與捐款金額）的信念，得到上人首肯後，採隔月出刊，又稱雙月刊。雖然只有一張A3兩面的篇幅，卻是志工劉桂英和王昆京

一九九七年三月號第二十七期首度刊登「上人開示」，當時是轉載臺灣已登過的「上人開示」，二〇〇四年至二〇〇八年由陳美卿翻譯上人開示文稿，自二〇〇八年九月起由金子昭教授翻譯日文至今。

沒有終點的接力賽

每期出刊前日以繼夜校稿、校對金額，以打字機一行行打出，一段段剪下後再以漿糊黏貼而成的手工版本，箇中辛苦實非現今的電腦化所能想像，若非滿腔熱忱與毅力，恐怕很難支撐下來，卻也因此培養了無與倫比的革命情感。前任執行長張秀民和現任執行長許麗香則是從不間斷，默默支持守護雙月刊的溫暖力量。

創刊號付印了三百份，二年後增印至一千份，目前因提倡環保減用紙張，每期只印刷一千四百份。編輯團隊各階段都有許多不同的生力軍及時補位，每個時期的一些改變與成長，一點一滴彫塑成雙月刊此刻的樣貌。

一九九八年分會還在三軒茶屋時，魏瑞芳以分會的舊型麥金塔電腦編輯月刊，之後並自行

購置新型電腦和大型印表機在家編輯，於二〇〇一年起由黑白版進階至彩色版。中山怜菽接棒後以小冊子發行，二〇〇四年吳惠珍加入後以雜誌方式呈現。

日譯組的志工楊怡芬於二〇〇九年加入編輯團隊，負責日譯的整合發包，延攬了許多日譯人才為雙月刊及分會翻譯文稿，因為翻譯工作多是獨立進行，彼此之間從未見過面，因此特別舉辦日譯菩薩相見歡，讓大家互相交流，並研討翻譯時碰到的困難及特殊用詞等等。

二〇〇九年，除了固定單元的主題報導、活動報導、社區報導、人文教室、志工身影、娑婆人生（個案報導）、寰宇慈濟外，開始嘗試一系列的專題報導，如二〇〇九年一〇二期至一

因為想讓孩子有機會多接觸中文，所以在二〇〇八年帶著滿五歲的大兒子來到人文教室。分會裡每一位志工親切的對待，總讓身處異鄉的玲韻有種回娘家的感覺，非常的溫暖。

陳玲韻 受證：二〇一六年

二〇一四年正式加入團隊擔任幼幼班老師，兩年後受證委員，玲韻說，能與在台灣已是慈濟委員的母親在不同的國界同做慈濟事，也算是行孝的一個方式。「緣深不怕緣來遲」，受證不是結束，而是使命感的開始。

〇一一年一一一期推出的「ECO專題」，以及二〇一〇年一〇五期起共五期的「日本之美」系列。二〇一二年第二一七期開始刊登「素食料理教室」，原先是以慈濟出版的素食料理食譜為範本，由分會志工試做照相，二〇一三年之後由望月春江專責書寫食譜及實做，直到二〇一六年八月，此後因無專人負責，中斷了幾年。二〇二〇年起每一期皆由南北和氣分別承擔一道料理食譜，以「我的蔬食行動」單元重新上菜，除了介紹自家拿手蔬食，也分享主廚茹素心得。二〇二〇年十月起增加了「生活佛法」單元，從大愛台「療癒果實」影片中摘錄貼近生活的佛法，讓讀者更容易親近佛法的智慧。

團隊分工

二〇〇七年起雙月刊編輯團隊分工更細，且逐步制度化和建立主題設定、文稿預定、邀稿



4



5

■ 4 配合雙月刊 ECO 專題而舉辦的以舊報紙製作購物袋體驗活動。攝影 / 王秀寧

■ 5 出刊前最後的痛苦時刻，日譯校稿與美編。攝影 / 慈涓

期盼疫情過後有更多新血加入，讓雙月刊更有活力，內容更豐富。



曾有重病失去求生意志的人，因為看到雙月刊打電話到分會求救，成為分會的關懷個案，並和台灣慈濟接力關懷，讓這位

生死一線間

誠後陸續投入環保、醫療和訪視，初期也時常帶著曾經報導他的故事的雙月刊一四八期（二〇一七年）到監獄與受刑人分享，以自身的經驗勸人向善。

個案也下決心付出心力成為慈濟志工，雖然最後因病往生，但在她人生的最後階段，因為有了慈濟人的陪伴而充滿愛與希望。

另外還有因雙月刊而逃出魔掌的驚險案例。一位天真無知的少女在台灣看到日本的求職廣告，應徵來到日本後才發現是惡意的人力仲介，因為護照被扣留又不諳日文，正巧在廁所看到一本雙月刊，便找機會打電話到分會求救。慈濟志工一步步指引她

編輯甘苦談

從茨城搭電車逃出到達分會，之後志工跟他們斡旋，並籌到善款幫助這位受害人回到台灣。

創刊初期因撰稿人不多，許麗香和張秀民幾乎包辦大部份文稿，雖然目前依然人力不足，但是大家互相補位，即使經常有狀況，比如因文章內容有誤而需要刊登道歉啟事；或催稿校稿到七竅生煙；或臨時多出或生不出文稿；或文稿修改不符作者期待；又或是相片的挑選不能讓所有人滿意等等，但編輯團隊這個溫暖的家，讓大家即使抱怨連連，卻捨不得離開，開會時也總是笑聲不斷，腦力激盪。



2



1



3

校稿、美編格式等 S/S 流程。如二〇〇九年一〇二期至二〇一每個月的編輯會議都會檢討上一期的錯誤事項及讀者回饋，討論預定文稿時也預先設定適合的撰稿人、催稿負責人等。

編輯團隊大致可分成中文、日譯、美編組。收到中文文稿後

■ 1 月刊從 A3、A2 尺寸逐漸轉化成雜誌型態。攝影 / 日本分會提供
 ■ 2 美編最後校稿乃謹慎用心。攝影 / 慈涓
 ■ 3 熱絡溫馨的編輯會議。攝影 / 慈涓

分享與迴響

雙月刊讓會員了解日本分會的動態和感人故事，也是日本

的一校、二校、定稿，以及日譯發包和定稿都有固定流程。美編組收到中日文定稿，美編完成後印出，再由志工進行紙本校對，確認無誤後才送印刷廠印刷成冊。之後由沼田青實通知五至六位志工來到分會幫忙，將名條一貼上信封以最快的速度寄出。這群在背後默默付出的志工們，讓雙月刊定時送到會員手中，當期雙月刊的工作才算圓滿完成。

特別值得一提的印刷公司的老闆滝古道信先生。他與雙月刊配合已超過十七年，從一開始單純的業務關係，因為認同慈濟的善行，收費也總是極盡所能壓到最低，到後來更成為美編志工，總在美編最後階段，見到他在分會幫忙校對日文稿和調整美編格式的身影，低調和謙虛的個性讓人感到無比安心。

慈濟人接引新志工的好幫手，讓初步接觸慈濟的人，得以一窺慈濟世界的樣貌，進而啟發善心。

二〇〇三年時，分會透過管道寄送雙月刊給在日本監獄服刑的台灣人，之後陸續收到其他華語受刑人的訂閱要求，目前每期固定寄送約二十本到各地監獄。期間有多位受刑人善心受到啟發，曾經從監獄寄送現金或物品捐贈給慈濟，或是捐出畫作供慈濟義賣。

現在是彰化慈誠志工的王琳恩，二〇〇九年時因欠債而被迫攜帶毒品到日本，入境時被查獲而判刑六年多，坐牢期間收到慈濟寄送的雙月刊，每次閱讀都十分激動與感動，並開始與慈濟志工書信往返，因為志工的鼓勵，他才能咬牙撐過那段失去自由的日子。當時他對雙月刊中所報導 3.11 賑災時，志工們不求回報的無私付出非常感動，也常反省自己曾經犯下的錯誤，因此立志出獄回到台灣後要加入慈濟志工的行列。王琳恩受證慈

人文真善美緣起與回首

證嚴上人曾說，「會說話、會寫字，就會寫文章。」
鼓勵人人都能為慈濟留下歷史。

撰文／陳靜慧



日本分會成立之初，就有一隻不間斷的筆，三十年來記錄見證每一段歷史，她就是第二任執行長張秀民。一九九一年日本分會成立後有文宣組，用如實對話記述口語的方式，手邊的相機留下了初期樣貌。不管是隻字片語、瞬間拍攝下的照片，化刹那為永恆，隨著時間更見珍貴。

此外，曾碧雲以相機記錄了從草擬章程到第一次會員大會，並製成相本。而一九九七年，在三軒茶屋歡送志工回台茶會，當時還開著餐廳、錄影帶店的林素子，以錄影機錄下這日的活動，日本分會第一次有了圖像、錄影、文字合一的記錄。一九九八年臺灣大愛臺開播，素子回到臺灣取經學習，才知道原來影像

要有遠、中、近景。此後好多年間，她以DV帶陸續錄下許多早期活動，卡帶連同紙筆寫好的圖說，用郵寄的方式寄到大愛臺。在那網路不普遍的時代，遇到重大事件時，透過電話即時連絡，活動後靠著郵寄或是傳真的方式，傳回本地志工的足跡。有時，連同洗好的相片，並寫好圖說，再從日本郵寄回花蓮本會給師父們看。

喜好文學的正副執行長

二〇〇二年時，張秀民接任執行長，出版過著作曾是文學少女的她，每次活動之後，在從東京回群馬的三小時電車上快筆寫下文章，到家後立即傳真給會打字的志工。同樣喜愛文學與寫作的許麗香接任副執行長，二人至今仍是文字志工，永遠做最佳的守候與補位，為日本分會寫下一頁頁感人的歷史。日本分會初期志工人數稀少，委員人數也

是個位數。三十多年來，二人是日本分會最忠實也是最盡職的人文真善美志工，深入參與了每一步歷史。

慈濟人文志業從二〇〇三年開始，推動「人文真善美·三合一」。但證嚴上人慈示不只是「文圖影三合一」，更應該「人事理三合一」，要「求真、求善、求美」達到真善美三合一，因此將「文化三合一」正式命名為「人文真善美志工」。

二〇〇三年，中文系畢業的陳靜慧因先生外派來日，受邀記錄志工故事，第一次採訪就流淚不已。同年新進職工吳惠珍，原本就有海報製作、展覽布置經驗，時常拍照、留紀錄，從那一刻起，近二十年來她是分會從平面紙本到雲端資料庫的守護人。

撐起一片天的慈青

隨著慈濟人文記錄深度化的腳步，本會對文史資料管理與

圖片編輯收集、選集、編輯，上傳大藏經之數位圖像基本規格、相片挑選的要點、圖說撰寫的要求、資料管理的默契皆有明確的要求。

二〇〇五年至二〇一一年期間，許多留學日本的慈青投入，年輕的力量帶來軟硬體的整合，並協助將作業模式帶向網路與電子化的時代。慈青洪晟瑞和陳仁暉專長資訊與照相，二人先後接任人文真善美的組長，開設課程，從頭教志工們如何照相與錄影。

二〇一一年日本3.11地震，帶來驚世的大災難，賑災活動與十梯次的見舞金發放，單靠日本分會有限的志工無法完成記錄的任務。隨著一批批前來採訪的大愛臺記者與國內資深的人文真善美志工一起前往災區，是一場場史無前例的震撼教育。

二〇一二起吳惠珍和陳靜慧有感於需要更多志工投入，也需要專業的學習，才能做好記錄與文史保存的使命，多次透過國內文發處同仁、大愛臺同仁、臺灣人文真善美等的連線協助，深入學習大藏經保存、史料彙整、歷史的角色與功能、出動編採共

修的SOP流程，大型活動的編採企劃書，主題人物故事拍攝企劃等。二〇一三年四月開始在日本推動每月共修，持續約一年。二〇一五年進一步與外縣市志工共修，帶動社區志工學習如何更完整的為當區留下歷史記錄。

分分秒秒都在歷史中

人文真善美志工是「走在最前，做到最後」的典範，當所有人收班回家休息，人文真善美才要開始寫稿、剪接，每項工作耗時、耗神、耗體力，完整的記錄，除有賴現代科技的運用外，也很需要有人用心將各方資料作整合與留存，落實為時代作歷史性見證的使命。

做為歷史的記錄者與守護人，從早期聽到什麼記什麼，看到什麼拍什麼的草創期，走入專業分工與學習，到現在人手一機的多媒體時代，挑戰仍在持續。紀錄歷史的腳步，不能間斷！



- 1 慈青陳仁暉（左一）專長資訊與照相，時常開課程教導志工照相技巧。
- 2 慈青洪晟瑞（右一）2007年新潟地震時，跟著正副執行長張秀民、許麗香前往災區協助賑災記錄，徹夜在飯店狹小空間剪輯。
- 3 李淑娟（左）2006年參加慈青開設的課程，開始學習照相與錄影、剪接，還有檔案建檔的方法，多年來慢慢走向專業，並長期在二樓辦公室協助日本分會整理檔案資料。
- 4 林素子（右一）1997年加入後，以錄影機錄下活動，從此有了圖像、錄影、文字合一的記錄。
- 5 曾碧雲（左一）從草創期開始，就以相機記錄了草擬章程至第一次會員大會等許多活動。

日本分會 經藏演繹回顧

整理／黃韻璇

經藏演繹是慈濟的特色，結合傳播的力量，將傳統的經文以精闢的偈文加上手語肢體表演，形成一種創新的經典詮釋方式，將佛教教義涵養成普世的價值理念。



- 1 二〇〇五年父母恩重難報經演繹。攝影／慈涓
- 2 東北鄉親與三重、愛知、靜岡、關西等會員，山梨、群馬志工，前來觀賞《父母恩重難報經》手語演繹。攝影／李月鳳。
- 3 勤行頌鐘鼓齊鳴。攝影／水谷瑞芳
- 4 《行願》由男眾演繹鑑真大和尚絕不動搖的意志，氣勢磅礴。攝影／簡淑絲

二〇〇五年及二〇一五年
《父母恩重難報經》

日本分會相距十年演繹了兩次《父母恩重難報經》：二〇〇五年時，首次在新宿文化中心演出《父母恩重難報經》音樂手語劇，呼籲孝道，因為沒有經驗及人力不足，臺灣志工呂慈悅皆同二十多位志工前來支援。而十年後的二〇一五年三月，日本志工再度於杉並區杉並公會堂結合每年一次祈福感恩會演繹。

人與人之「絆」，距3・11已將近四年份外具有意義。各方會眾雲集，其中最遠的是來自宮城縣東松島市、石卷市等災區的二十七名鄉親，以及來自三重縣、愛知縣、靜岡縣、關西等近三十位會員，加上來自山梨縣、群馬縣近二十名的志工參加。除此之外，還有僑界貴賓、留學生、慈濟日本籌備人醫會的醫師、中文班的家長、老師與學

句都可成為人生的座右銘。期待透過身體語言走入經藏，讓每顆善良的心結合，讓愛循環，化身為淨化社會的清流。

二〇一九年《鑑真大和尚》
行願東瀛

二〇一九年八月二十五日這天，在東京四谷區民中心上映的《鑑真大和尚》電影動畫與音樂手語劇，點燃了觀眾的心燈，洗滌了人人的內心。二〇一二年至二〇一三年，慈濟日本分會也曾於各地播放這部由大愛電視臺所拍攝的《鑑真大和尚》動畫。尤其是3・11東日本大地震重創日本，希望藉由鑑真大師「為傳正法，不惜身命」的精神，鼓舞所有鄉親不畏艱難走向復興之路，也盼望用愛用關懷來陪伴受苦的人。

同年七月起，日本慈濟志工開始排練《行願》及《圓夢》，於九月二十一到二十三於宮城

生等計一百一十五位演員，共同演繹共十個曲目的音樂手語劇。

當時已有「法緣種子」及「演繹種子」產生，在進入演繹練習前有「法緣共修」。透過上人開示及法緣種子的分享，讓演繹者進入《父母恩重難報經》的世界。當時也第一次邀請參加演繹者「誠心齋戒」，入經藏應淨心淨口，茹素救地球也是報父母恩。

那一天不論是舞臺下七百多位的觀賞者，或是舞臺上二百多位的演繹者，都對於孝道有更深刻的認識，與體認善盡孝道的重要性。會眾在活動最後，領取到證嚴上人福慧紅包的祝福，並且一起感恩過去，祈求天下無災無難。透過這個音樂劇建立起人際之「絆」，重新省思親子與家庭倫理關係更是迫切之需。

二〇一七年祈福感恩會
《無量義經》

縣的東松島市及多賀城市演出，同步舉辦3・11攝影展——《行願》由男眾演繹鑑真大和尚絕不動搖的意志，而《圓夢》則由女眾演繹鑑真大和尚溫柔的堅持與夢想。

「為了讓日本人能更深入了解鑑真大和尚的故事，你們以淺顯易懂的方式呈現出來的表演，讓人非常感動。」護國寺修養會佐藤靜慧說出心中感受，也稱讚慈濟志工「演繹非常美，像詩歌般的清澈寧靜，在這個酷暑的時節，大家努力練習的成果，如花開般的燦爛，有時浪花朵朵，有時又像是天上的雲彩。」

證嚴上人：「演繹是傳法而非表演，發揮『法髓移植』的良能，將法髓傳入人心。」日本分會三十年來在志工們的推動下，演繹出不少令人感動的經典，參與過後不少人受經典啟發改變人生觀，或因此進入慈濟大家庭，將佛法演繹在自己的生命當中。



社區志工 1

社區志工緣起與發展

證嚴上人於 1997 年推動「社區志工」概念，要慈濟志工回歸落實所居住之社區，鄰幫鄰、里幫里，並在 2003 年開示了「合心、和氣、互愛、協力」，立體琉璃同心圓的四合一組織架構。

而日本分會 1991 年成立初期，人力單薄，不管是個案、機構關懷等慈善志業，或是社區茶會，都是分會委員志工們一起互相配合支援，一一圓滿成就的。

撰文 / 陳思道

驚世之震 愛心從地湧出

一九九九年九二一臺灣大地震，震醒了許多富有愛心的有緣人，認識慈濟並參加志工。二〇〇〇年首辦祈福感恩會，二〇〇一年搬到現址的新會所，二〇〇五年首辦《父母恩重難報經》經藏演繹，上人慈示的「行善行孝不能等」啟發了更多志工加入，日本慈濟委員人數也從一九九八年的僅有十八位委員，增長到二〇〇六年的七十位委員，十四位慈誠。

二〇〇六年，在慈濟志工逐漸增加的因緣之下，日本分會也跟緊腳步，開始分組落實社區志工的概念。第一次分組，一共有九組，其中東京、神奈川、埼玉及千葉四個都縣重新劃分四組，加上群馬、山梨、愛知、關西及九州四國地區等五組。組名單純稱為第一組、第二組，依序到第九組。前四組除了在各自社區展開機構關懷、個案關懷之

西協力，擴編為八個協力組。依地理位置以二或三個協力為一個互愛組，再以兩個互愛為一個和氣組，而南和氣、北和氣兩個大組結合起來，就是日本分會一個大合心組。

合心和氣 更要互愛協力

配合志工人數的流動，每兩年日本分會都會評估做調整。不只每一組的人數，還要考量縣市的地理位置，因為志工們幾乎都是以搭電車為主要交通工具，所以要考量同一組組員之間的交通便利。而四合一社區的分組方式，也在每兩年的調整之下，這十年來也逐漸穩定，調整幅度也減少了許多。

二〇二二年目前，包括外縣市，日本分會共計有十二個協力，各組也依循著當地志工特色及當地的需求，辦理茶會、讀書會、機構關懷、街友關懷、素食料理教室等，在社區灑播愛的種子。



■ 1 街友感恩慈濟疫情下依然提供便當，投下銅板回饋，想盡些微薄力量。攝影 / 林真子

■ 2 杉並區老人院關懷。攝影 / 日本分會提供

■ 3 關西志工們，每年參加大阪中華學校春節祭。攝影 / 日本分會提供

■ 4 山梨義賣，小志工們協助整理義賣物資。攝影 / 日本分會提供

■ 5 福生茶會，教導會眾手語。攝影 / 日本分會提供



■ 新瀨災區，志工張秀民（右）陪伴耑慰災民。攝影／慈涓

一九九一年張秀民到東京參加日本分會首次的說明茶會之後，回群馬後成為第一位慈濟會員，其後每週都到東京參加活動。一九九四年同住群馬的佐藤美江連絡上張秀民，交給她原本要帶臺灣的善款，也拿回證嚴上人的開示影帶及錄音帶，之後她又介紹了半田蓮美加入，開啓了

群馬——張秀民

日本分會是以東京為起點而開展，群馬、山梨、關西等地早在成立之初，就有種子同步湧現。

整理／張秀民、陳靜慧

日本分會初期，志工人數極為稀少，資深委員不論遠近，只要有緣就前往各處舉辦茶會介紹慈濟。慈濟社區志工的觀念，從一九九七年在臺灣開始推動，將所有志工重新編組，希望志工能夠回歸社區，就近服務關懷，凝聚社區民眾的感情。這樣的觀念，也慢慢落實到海外。

社區志工II 其他社區緣起與早期發展



6



5



8



7

四合一組織架構，是為了落實「小組關懷，多組活動」，一個協力組一、二十位的志工，大家平時可以互相關懷，凝聚力量落實關懷當地的社區。而一旦有需要更多人力的活動或救援工作，就要多組合心協力，一起圓滿成就。最典型的例子是，每個月兩次的代代木公園街友熱食發放，單一協力組的力量不足，所以每一次的熱食發放活動，是以和氣為單位來承擔；有的協力承擔煮飯，有的協力做事前準備，或負責現場發放，或承擔發放後的清洗收拾。而且因為這個活動是在星期

■ 5 志工為代代木發放準備便當。

攝影／慈涓

■ 6 群馬老人院關懷。攝影／張秀民

■ 7 埼玉縣設施關懷，物資捐贈，志工介紹毛毯。攝影／慈涓

■ 8 豐島區法親陪伴關懷。攝影／加藤麗莉

群馬社區的第一步。

半田蓮美說：「佐藤拿很多〈渡〉的錄音帶給我後，每天都歡喜在聽，在日本特別想念故鄉，尤其都講台灣話，上人的開示，靜下心來聆聽，受用良多。」

一九九五年因關懷姜桂花女士，而有了高崎地區多位志工加入，一群嫁在群馬的臺灣媳婦，開始在張秀民家中聚餐及讀書，之後輪流在不同志工家中開茶會。

一九九九年及二〇〇〇年，群馬觀音山舉辦了親子營，使得群馬會員人數大大增加。讀書會至二〇〇九年每月定期舉辦。二零零零年開始參加當地的國際交流義賣會。二〇〇二年開始機構關懷，先後關懷過四家老人院不間斷；同年也設置環保點，每日做環保資源回收，直至二〇一二年因法規而停止。

一，每個協力可以出來支援的人數不一，人力不足時，或以互愛為單位承擔，甚至以和氣或踏和氣組共襄盛舉，相互支援。

二〇二〇年新型冠狀病毒在全球蔓延，日本也不能倖免。在疫情籠罩之下，出門到分會參加志工活動等，變成比較困難的事。這個時候，更彰顯了社區四合一組織架構的重要性。在本會的宣導之下，各社區以協力為單位，辦理線上讀書會，猶如遍地開花，既能受到法雨滋潤，更能增進同組社區志工之間的相互關懷。這一波疫情，看似拉開了人與人之間的距離，但在上人慈示的四合一組織架構之下，同一個社區志工之間的互動，卻是空前的熱絡。

依社區分組，不外是個方便法門，在自己觸手可及之處，走入人群，就近關懷付出，造善因、結善緣。我們期許可以接引更多有緣人，將慈濟大愛的觸角伸展到日本每一個角落。



山梨——黃碧霞

「三十年前的一九九一年，在台灣看到《靜思語》書，我便買了兩本，一本送給要去當兵的兒子，一本帶回日本，但我從未翻開看。」山梨志工黃碧霞與慈濟的因緣甚早，只是當時生活沒有重心，迷於打牌。有天下雨，無法出門，於是將書打開來，一口氣看完，哭了很久。當下，她打電話回花蓮，接電話的師父給了她日本分會負責人謝富美的電話。聯絡當天，「她告訴我當天中華學校有義賣，妳可以過來！」黃碧霞包了一部中型車，載了多位山梨的臺灣朋友來到東京中華學校，不但捐款也買回很多義賣品，之後每個月帶會員們到三軒茶屋參加聯誼會。

一九九三年隨多位志工回花蓮尋根，她大受感動，買回五十件黃色志工服及五十本《靜思

語》送給日本分會，之後種種因緣沒有立即受證，已加入志工的加藤惠與吳麗雲，成為了山梨最初受證的委員。

一九九八年東京慈濟人聯合山梨志工一起前往吳麗雲服務的老人院關懷。二〇〇〇年成立親子成長班。二〇〇二年之後不定期舉辦茶會和讀書會，多次在加藤惠的餐館召開茶會。此外經常到東京參加歲末祝福等活動，並不定期參與當地義賣活動。二〇一二後固定每月有讀書會及聯誼共修。

新瀉——西脇秋蘭

志工西脇秋蘭是從臺灣的《慈濟月刊》上知道慈濟日本分會，於是主動跟謝富美聯絡。此後每月由日本籍丈夫按月捐款給分會，而每次捐款拿到收據他會對太太說：「我又捐款了喔！妳高興嗎？」二人是新瀉最初的志工，一九九七年夫妻回花蓮受證。

秋蘭在日本對一個想行菩薩道的團體「佛國土」非常欣賞，於是特意加入會員，也介紹臺灣慈濟，促成會長河野芳男帶十三名佛國土幹部到花蓮參訪。此後，日本分會與佛國土一

直有密切往來。佛國土長期以來很護持慈濟，臺灣九二一大地震時曾大筆愛心援助。

再能參加志工活動，但是有流利日語的女兒金媚湘在東京，加入慈濟的「眼癌關懷」志工，持續這份善緣。盧秀秀覺得上人非常偉大，什麼事都能做，而且平等的愛心對全世界令她非常感動。

名古屋——盧秀秀

現年七十九歲的志工盧秀秀在五十多年前克難慈濟功德會創立不久，就曾到花蓮拜見過上人，與上人同桌吃飯，成為慈濟會員。後來日本分會成立前後，跟她有電話連絡。

華航一九九四年名古屋空難發生後，在名古屋的她第一個趕到現場，兩百多具屍體，印象深刻，至今忘不了。第二天東京慈濟人趕到，不安的情緒因有同伴而堅強。在名古屋也因慈濟對家屬的陪伴，而令百名臺灣人認同，加入為她的會員。只是二十多年中，大多回臺灣去了。

目前因身體狀況欠佳，不

關西——段淑華

關西志工的緣起甚早，一九九一年當時住在大阪的段淑華有位鄰居是慈濟會員，每年有臺灣委員來大阪收會費，當年因大陸華東水災，鄰居問她願不願捐款救災，因此知道了慈濟。鄰居回臺灣帶回上人開示等錄音與影帶，她看了大受感動，立即回花蓮當一個月的志工。

那時，剛好志工顏惠美要到日本考察安寧病房，段淑華隨行，也因此在大阪首次召開茶會。之後聯絡上了謝富美，成為關西的第一位志工。

一九九二年她到東京參加成立二週年四大志業說明會受證委員。一九九四年四月華航名古屋空難發生後，在名古屋的她第一個趕到現場，兩百多具屍體，印象深刻，至今忘不了。第二天東京慈濟人趕到，不安的情緒因有同伴而堅強。在名古屋也因慈濟對家屬的陪伴，而令百名臺灣人認同，加入為她的會員。只是二十多年中，大多回臺灣去了。

屋空難，毫無經驗的志工們，以大無畏的精神走入空難現場。一九九五年，阪神大地震，段淑華帶動阪神地區的會員前往災區勘災，陪伴與關懷當地留學生。

段淑華目前長住花蓮當志工，但愛的因緣早已在關西發芽。一九九九年臺灣發生九二一大地震，有日她接到了施燕雪、陳慧珍的電話，她們是臺中人，不約而同的表示：「家人在九二一時受到慈濟幫很多忙，一定要捐款給慈濟。」因此加入志工。

早期關西志工活動時善用自宅、公民館或四處租借場地。

- 1 黃碧霞（右一）3·11賑災，陪伴鄉親。攝影／慈濟
- 2 新瀉中醫義診，西脇秋蘭（右二）協助醫生。攝影／日本分會提供
- 3 名古屋盧秀秀（著白衣）前來會所參觀親子班活動。攝影／日本分會提供
- 4 慈濟關西地區，每年參與「大阪春節祭」活動。攝影／日本分會提供
- 5 「呼嚕呼嚕工房」素食料理推廣。攝影／日本分會提供
- 6 段淑華（右）前來分會參加活動。攝影／日本分會提供

二〇〇一年開始，有社區素食料理教室並介紹慈濟。二〇〇二年開始參加僑會春節祭活動至今，同年舉辦了第一次的祈福感恩會。這一年，也第一次走上街頭掃街，並開始首次的機構關懷，前往老人院互動。隨著志工增加，分別從自己就近的社區向外關懷。二〇〇五年身心障礙機構「呼嚕呼嚕工房」素食供餐。二〇〇六年志工租借豐中市區民會館設攤推廣慈濟人文，也與社區交流。二〇〇七年，前往兒童福祉設施遙學園協助打掃。二〇一〇年開始，有大阪聯絡點作為心靈道場，志工有了固定的家！

身在海外早期的志工，或以電話聯絡，或以錄音帶傳法，或召開茶會，建立起各社區間互相聯誼與救援的網路：一方面也力求就地生根，回饋當地。愛是共同的語言，有愛不孤單，分散日本不同縣市的志工，從第一顆善種子開始，步步深入社區。一步一腳印，由一而生無量。



南關東和氣社區近況

撰文／河村吉美



南關東和氣社區特色是人人都有精進勇猛的赤子之心，行動力強，分會活動無不熱心支援。新宿區離分會近，因地緣之便，每遇代代木發放，不畏寒暑風雨，清晨即時準備洗米、包便當熱食發放，不遺餘力。尤其在義賣會，更是熱練俐落，熱情洋溢，增益分會發展。不久前，在分會舉辦茶會幾乎人人都出席，



■ 1 橫濱第一顆種子林靖娥（右），早期因臺灣友人勸募，從海外護持花蓮慈濟醫院建院活動。一九九一年日本分會成立後，隨即加入志工，在橫濱地區推廣慈濟，積極協助募款募愛。
攝影／蘇美菁

■ 2 代代木公園素食展，吸引衆多人潮。
攝影／陳文絲

■ 3 代代木發放香積志工合影。攝影／陳文絲

分享法喜，增長情誼。

中央區的老人院關懷活動，以老吾老以及人之老，幼吾幼以及人之幼的精神，音樂演奏、帶動唱，用有溫度的心陪伴，為老人家帶來溫暖與關懷。

品川區配合分會致力社區環保，小至酵素製作到環保再利用，延長物命提昇生活的價值。在每年一度代代木公園素食展上吸引了許多人對茹素的關注。

神奈川區菩薩平均年齡七十歲，心寬念純不計車程車資昂貴，誠敬供養，常常遠道支援香

積，讓大家心存感恩，心念聚合。

社區慈善與人文推廣

此外，南關東社區十年前開始在分會附近的大久保地域中心推動心素食儀教室研修，接引社區志工，除了靜思語教學外更讓社區朋友深入了解慈濟人文，溫馨的素食交流是推動素食的最佳捷徑！

近五年的新芽助學金計劃，由分會企劃與啟動後，再由社區志工接手，就近關懷弱勢家庭的大專生，讓富裕國家中的生命暗角，能點燃希望的光芒，學子們因為感恩而融入慈善活動，從知福惜福中了解回饋和感恩，明白人人付出愛心是造福社會的原動力！

因為出發心一念善心的聚合，南關東全員，誠正信實，本著合和互協的精神，願生生世世追隨上人，同心同志發願同行菩薩道！

北關東和氣社區近況

撰文／蘇美菁



■ 1 個案關懷，疫情下貼心送上物資。
攝影／蘇美菁
■ 2 川口市街友關懷，志工們集合準備出發。攝影／蘇美菁提供
■ 3 捐贈物資前，志工們協力打包整理。攝影／蘇美菁

■ 4 落實社區，志工掃街不畏髒臭。攝影／郭惠珍
■ 5 志工們前往微笑工房設施，推動素食。攝影／藤川月鳳

這兩年因為疫情籠罩，人心不安，自肅期間，經濟蕭條，很多人生活陷入困境、心情煩悶，北關東和氣數度召集會議商討，社區開始了助人行動。志工篠田惠和蘇美菁，在幾番波折後，二〇二二年四月，在埼玉縣川口車站附近的地下道開始進行夜間街友發放，街友為了避開人潮，每日天剛亮就離開棲身地，到深夜才回來，所以發放時間也就在深夜十點半過後開始。希望在嚴峻的疫情下，讓他們感受人間有愛。

疫情下啟動機構關懷

以前有互動的喜憨兒 Smile 工坊，疫情期間謝絕訪客，也許是因為與外界隔離太久了，所以五月志工土方理惠電話聯絡時，他們非常的開心，當我們說要送素便當，他們馬上答應，同時說可以用他們的廚房來做餐。於是六月二日一群志工過去煮了非常健康又營養的午餐，同時推素還

帶動康樂活動，當天氣氛十分愉悅。三週後志工再度送米過去，而且答應每三個月會過去煮素餐和帶活動。兒童食堂也是在大家腦力激蕩下的構想，它的宗旨是幫助貧困家庭提供兒童餐點，同時也發掘更多弱勢及貧困的家庭，現階段先以贊助米和油為優先，等待時機成熟、一切就緒後，才做供餐。除此，九月開始援助專門收留被家暴及身心障礙的孩童，得知機構很欠缺衣物、食物等等，啟動社區的力量提供物資支援。

志工也發動隨時隨地做環保愛地球的活動，上班途中、散步、買菜時，只要在路上看到垃圾就馬上做回收。志工布施惠帶著孫子一起撿垃圾，志士林勳每天在住家周圍附近街道掃街，從不間斷。

感恩我們身心健康、四肢健全，更有幸得遇明師（證嚴上人），可以聞法長智慧。今生不向此身度，更待何生度此身，志工們皆把握機緣，用心付出。



30
慈濟日本分會
三十周年專刊

社區志工篇

群馬・山梨・關西

社區近十年概況

慈濟日本志工以東京為中心而開展，目前南、北關東和氣以外，還有群馬、山梨、關西三個社區皆成立甚早並持續至今。

撰文／陳靜慧



群馬：古老的老社區

群馬縣是起步甚早的古早社區，目前有六位委員。早自一九九七年開始志工茶會、讀書會，二〇〇二年啟動的社區老人院關懷持續至今。二〇〇二年至二〇一二年，在當地做環保資源回收，並將所得一半護持大愛台一半國際賑災。

近十年來，在社區慈善方面，增加助念及告別式、長期個案關懷；人文推廣方面除了在當地華僑社團中介紹慈濟，對日本分會各項活動，如大型災難募款、賑災活動、義賣會、入經藏練習等也積極參與。

去年老人院關懷因疫情而暫停，不過社區個案、法親關懷仍不間斷，並積極推動回歸竹筒會員募心莫愛活動。

山梨：茶會互動續長情

山梨縣志工主要是分布在

案關懷、往生助念、告別式、監獄受刑人關懷、機構關懷、大型賑災活動，只要有需要，無不全力付出。此外，人文活動也是多方展開，從早期持續參加僑界春節祭推動環保及推廣慈濟之外，多年來有經書導讀、料理教

笛吹市、甲府市，目前有十位委員與一位慈誠。多年來山梨地區志工每月一次定期聯誼與共修，遇日本分會有重大活動時，也會專車前來參加。二〇一六年熊本地震時，儘管距離遙遠也參與了賑災，六月時，東京十多位志工專程前往山梨，大家在茶會中彼此交流並分享賑災心得。

近二年志工林素子提供自家作為社區道場共修處。疫情期間，每月共修暫停，但為響應證嚴上人呼籲之茹素護生，仍不定期聚會邀約學習素食，也推動人人出門做環保，隨手愛地球。

關西：慈善與人文的開展

關西地區範圍包括了京都府、大阪府、滋賀縣、兵庫縣、奈良縣、和歌山縣、三重縣等縣市，目前慈濟委員十二人、慈誠二人。

志工人數雖不多，但勇於承擔。慈善方面從急難救助、個

室、氣功教室、手語入經藏等，並於去年開始每週線上讀書會。

二〇一一年東日本大地震與二〇一六年熊本大地震賑災時，或是搭乘夜間巴士，或是搭飛機前往，不怕路遙。二〇一八年西日本豪雨，關西志工挑起大梁前往岡山勸災賑災，膚慰鄉親。

此外，二〇一四年開始西成區街友關懷，深入都市暗角，二〇一六年發放五百人次物資，二〇一七年開始定期熱食發放。新冠疫情爆發後，熱食供應改為提供飯糰。

持續多年的料理教室、氣功教室、福祉機構關懷等，因新冠疫情暫停。二〇二〇年開始，關西首次針對福祉機構的孩子，提供新芽助學金。疫情中，急難救助與個案關懷也不曾中斷，愛不停歇！

外縣市志工從一顆種子開始，慈悲的腳步，一步步更加深入當地。期待疫情過後，慈濟的愛能夠持續飛揚。以愛接力，落地生根，回饋當地。

- 1 群馬環保站。攝影／日本分會提供
- 2 群馬老人院關懷。攝影／林秋里
- 3 群馬讀書會。攝影／張秀民
- 4 山梨茶會。攝影／日本分會提供
- 5 山梨素食推廣義賣。攝影／日本分會提供

- 6 大阪逢學園機構關懷。攝影／日本分會提供
- 7 熊本震災熱食發放。攝影／孫素秋
- 8 大阪西成區熱食發放。攝影／日本分會提供



慈濟日本支部三十周年の足跡・大事記

訳／小野雅子・整理／張秀民 陳靜慧

1991年

- 6月3日 日本支部を設立するために、書類提出。
- 6月6日 日本支部設立許可を取得。
- 6月23日 日本支部設立のお祝いに台湾の慈濟人が出席。
- 8月18日 謝富美（靜聖）は慈濟日本支部に
おける初めての委員ボランティア。
- 10月25日 本国に帰ることを支援した初めてのケアケース。
- 12月3日 中国語クラスが広尾にて開講。

1992年

- 3月27日 劉秀忍氏が船橋市の家を集会する場所として提供。
- 4月27日 初めての長期的なケアケースを開始。
- 6月7日 日本支部一周年を記念して親睦会を開催。
- 8月10日 慈濟のルーツを探すために、初めて花蓮精舎へ。
- 11月1日 《日本慈濟世界》月刊誌が創刊。
- 11月 宋吳卻氏が三軒茶屋の家を集会する場所として提供。

1993年

- 4月22日 毎週木曜日定期的に世田谷区の
老人院でボランティア活動。
- 7月22日 北海道の奥尻島で地震が発生、見舞金を寄付。
- 10月2日 国慶節、初めて中華学校のフェスティバルに参加。

1994年

- 4月26日 名古屋空港で中華航空機墜落事故が発生、4月27日と30
日名古屋空港で、犠牲者の家族をケアする活動を実施。

1995年

- 1月17日 阪神大震災が発生、被災地を視察して被災者への
物資配布及び留学生に見舞金を配布。
- 3月 初めて山友会と協力してお握りを作り隅田川の
路上生活者に配布。
- 9月24日 初めて三鷹国際交流フェスティバルに参加、
売上金をカンボジアに寄付。
- 11月7日 初めて隅田川の路上生活者に寝袋を配布。

1996年

- 5月18日 骨髓バンクを支援する東京の会に出席、台湾と日本の
骨髓データベースのつながりに一翼を担う。
- 6月9日 慈濟青年部を立ち上げ、定期的に毎月の
第一日曜日親睦会を開催。

1997年

- 12月29日 日本慈濟青年部初めて「創意團康企劃營」を開催。

1998年

- 9月27日 中国の華東水災を支援するために、
初めての街頭募金実施。

1999年

- 5月 群馬県観音山で初めての親子キャンプが開催。
- 9至10月 台湾921地震が発生、各地より寄付金が寄せられた。

2000年

- 2月26日 佛所護念會高輪教會で初めての祈福感恩会を開催。
- 11月19日 初めての委員の研修勉強会を蒲田で開催。

2001年

- 6月3日 初めての無料診療活動を福井県三国町で実施。
- 12月8日 慈濟日本支部十周年及び新事務移転祝い。

2002年

- 4月 子供の中国語クラス月三回の開催。
- 8月18日 新宿大久保通での清掃活動開始。
- 7月 群馬県の伊勢崎で資源回収ステーションを設立。
- 8月17日 初めての二日間のボランティア研修を実施。
- 8月31日 初めての二日間の親子キャンプを開催。

2003年

- 5月8日 初めての灌仏会を開催、
同時にSARS疫病のための齋戒を呼びかけた。

2004年

- 4月4日 正式成立快樂親子班、設組織章程招收六至十二歳親子
- 7月25日 新潟県の三条市で水害が発生、掃除、片付けなどの
支援活動実施。

- 10月25日 新潟中越地震が発生、被災地の十日町、
小千谷で炊き出し及び物資配布活動を実施。

2005年

- 3月27日 《父母恩重難報經》音楽手話劇が
東京新宿文化センターで開催。
- 10月18日 「真善美」生け花教室開催。

2006年

- 1月22日 新宿中央公園で路上生活者への炊き出し活動を実施。
- 6月11日 初めてのチャリティーバザーを開催。

2007年

- 3月18日 中国語クラスが初めて修了式及び親睦会を実施。
- 5月10日 証嚴法師が第二十四回庭野和平獎を受賞。
- 5月20日 慈濟青年部が初めて新宿で清掃活動を実施。
- 7月19日 新潟県柏崎の震災で被災された方々のために
炊き出し活動を実施。

2008年

- 7月15日 関西地区で四川省及びミャンマーを支援するための
チャリティーコンサートを開催。
- 8月17日 日本支部で吉祥月祈福會を開催。

2009年

- 1月5日 「年越し派遣村」 日比谷公園で失業者のための炊き出し活動を実施。
- 3月2日 路上生活者のための炊き出し活動を初めて東京代々木公園で実施。
- 12月19日 初めて上野公園でホームレスに五百枚の毛布を配布。

2010年

- 4月19日 初めてのベジタリアン料理教室が大久保地域センターで開催。
- 6月 海外から治療にきた小児眼腫瘍の患者への通訳及びケア活動を実施。
- 11月6日 慈濟日本支部における大阪連絡事務所を設立2011年
- 3月11日 東日本大震災による津波や原発事故等の複合災害が起き、証厳法師は日本支部とテレビ電話を通じて被災状況の確認及びこれからの支援活動について指導してくださった。また、齋戒と祈ることを呼びかけた。
- 3月15日 3・11災害時初めて茨城県の大洗町で炊き出し活動。同日、台湾からの救援物資が到着。
- 3月24日 岩手県の被災地を視察及び救援物資を配布、27日まで。
- 5月16日 代々木公園で炊き出し活動を行った際に、路上生活者達と一緒に灌仏会を開催。
- 6月9日 見舞金配布活動が岩手の釜石市及び陸前高田市を始め十回にわたって東北の二十六市町村の九万六千九百七十四世帯に配布、合計金額は五十億千六百四十二万円になった。
- 8月29日 釜石市と「給食及びスクールバスの補助金」に関する協力協定に調印。
- 10月30日 東日本大震災のお祈り会は新宿文化センターにて開催。

2012年

- 4月18日 「3・11心と心繋ぎましょう」写真展が新宿全労済ホールで開催。オープニングセレモニーに日本復興大臣の平野達男様よりお言葉を頂いた。その後、この写真展は埼玉、山梨と大阪などでも行われた。
- 9月21日 宮城県の東松島市と加賀城市にて「3・11心と心繋ぎましょう」写真展及び日本語バージョンの《鑑真大和上》動画を放映。
- 10月18日 「3・11心と心繋ぎましょう」写真展が大阪市立総合センターにて開催。

2013年

- 4月13日 岩手県の大船渡にて「3・11心と心繋ぎましょう」写真展及び日本語バージョンの《鑑真大和上》動画を放映。
- 6月10日 慈濟の青年部は山梨県の大月市で稲を育成。その収穫した稲は歳末祝福のお年玉に使われた。
- 9月28日 初めてのベジタリアン料理コンテストが新宿大久保地域センターで実施。

2014年

- 2月7日 慈濟青年部は新潟県の除雪困難なお年寄りに除雪のお手伝いを実施。
- 7月27日 四谷区民センターにて吉祥月祈福活動を実施。この吉祥月祈福活動が初めて日本支部以外の場所で開催された。
- 3月8日 初めて路上生活者のボランティアが慈濟のルーツ探しのために花蓮へ。

2015年

- 1月11日 関西地区のボランティアが西成区の路上生活者に生活物資を配布。

- 2月11日 十年ぶりの《父母恩重難報經》音楽手話劇が杉並区民会館で開催。
- 7月15日 靜思茶道体験クラスを開講。
- 9月13日 茨城県常総水害後、被災地で清掃活動や片付けなどの手伝いを実施。また四日間計五二七個の菜食弁当を市役所に提供した。

2016年

- 2月9日 東北のボランティア達は台湾の台南の震災のために募金箱を手作りして、募金を実施。
- 4月22日 熊本震災後、ボランティア達は三回にわたって被災地の大津町で炊き出し活動を実施。
- 9月1日 「靜思小築」を立ち上げ

2017年

- 3月31日 日本支部において初めての新芽助学金授与式が日本支部にて開催。
- 4月2日 関西地区で初めて定期的に西成区の路上生活者に炊き出し活動を実施。
- 5月25日 毎週月、木曜日の夜オンラインで勉強会を開催。
- 8月25日 《無量義經》の写経クラス開講。

2018年

- 3月13日 初めて岩手県の大槌町で新芽助学金を授与。
- 4月 宮城県のボランティア達はほどいた毛糸を帽子に編み直して路上生活者に贈る。
- 7月9日 西日本豪雨被害、関西のボランティア達は岡山県の真備町で炊き出し活動を実施。また、被災された小中学校に給食着（エプロン）等を寄付した。

2019年

- 8月27日 日本支部は全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVOAD）に加入。
- 10月18日 台風19号の被害を受け、被災地の宮城県丸森町で千枚の毛布を配布。
- 10月20日 台風19号の被害を受け、埼玉県川越市で清掃活動を実施。
- 11月8日 台風19号の被害を受け、長野県の被災地で炊き出し活動を実施。

2020年

- 2月 世界各地でコロナウィルス拡大の影響でマスクが不足。その対応として、ボランティア達はマスクを手作りました。また、菜食を推し進める活動も行っていた。
- 4月 マスクなどの医療防護具を東京都庁や老人ホーム、病院などの施設に寄付。
- 4月 関西地区において初めて新芽助学金の授与。
- 5月9日 コロナ禍で初めてオンラインによる灌仏会を開催。
- 5月20日 花蓮本部からの防護物資が届き日本各地の病院などに寄贈。
- 7月6日 オンラインによる朝の法話勉強会に、初めて日本語の同時通訳を導入。
- 8月 ボランティア達は各地域で勉強会を開催。仏法を人々に分かち合うことに努めた。また、祈ることと菜食を勧めることも励んでいた。
- 9月12日 初めてオンラインによる吉祥月活動を実施。

2021年

- 1月31日 初めて複数の会場と同時にオンラインによる祈福感恩会を開催。

日本支部 三十周年の物語

訳／李曉萍 文／張秀民

あの年、日本支部初代執行長の謝富美氏は陽明山での交通事故

故において奇跡的に命を救われ、善行での恩返しを觀世音菩薩に誓った。一九九〇年、慈濟委員宋吳の紹介により上人に会い、日本事務所設立の許可申請をしてみることを約束した。

不思議な縁で、日本支部の設立に困っていた時、高医師と日本人長谷川氏が助けに現れた。成立規約を検討する時、日本に留学している四人の僧侶が助けにきた。行政事務が必要な時、池田氏の協力があつた。書類をタイプする時、李麗嬌氏が来た。すべては上人のお諭し…「何でも一つの決心、一粒の種から始まる」を証明しているようだ。

無量な方法が一つから始まる

一九九一年五月九日に日本支部が設立、謝富美師姐は支部の創立資格を取得した後、七月に台湾に戻り上人に会った。上人より「日本支部の推進を着実にやってください。遠くの目標を追求してはいけない。克難から始め、誠実を原則に仕事をする。多くやればやるほど技量が上がる。すなわち智慧である。華僑や留学生に慈濟をよく知らせ、基礎がしっかりしてから、支部の活動を広げていく。」

一九九二年、日本支部の職員は慈濟のルーツを探るために初めて花蓮に戻った。上人より「慈濟が慈悲喜捨の仏教精神と誠実な慈濟精神で仕事を行い、難点

克服精神を抱き、喜びの心で支部の仕事を推進し、そうすれば長続きする。」

八月十二日に劉桂英氏、張秀民氏が委員に認証された。上人より：「慈濟は世の中に入る仏法で、奉仕の精神で済世の仕事を行う。□で宣伝することではなく、模範となって、体で実践する！世の中に入る仏法を実践するには、まず心を広げて、自分を縮小しなければならぬ。色々なことを気にし過ぎてはいけません。お釈迦様を学ぶのは菩薩を学び、慈悲で心を寛大にし、人との縁を広げることです。」上人のお諭しを受け日本に戻った後、より積極的に茶会や連合会を開催し、各業界に愛の心を募りました。

初期の委員は上人のお諭に従って苦難が何処かにあるところへ行く。北海道の奥尻島に地震があれば支援活動に駆けつけたり、九州のケア活動のために遠くても行き、老兵の李仙賜氏

が半世紀ぶりに台湾の親戚と集まるのを助けることに協力した。

そして、成立初期に最も多く助力したのは来日旅行者が突然に病を発症したり、亡くなったりした事例である。一九九四年四月、名古屋空港での中華航空事故において、ボランティア達誰もがこれほど多くの遺体を初めて見ても臆することなく自分たちのできることとして遺族を慰めた。

菩薩の大募集を通じて慈濟ボランティアが一人増えれば、善の力も増える。初期はインターネットがなく大愛テレビもなかった時代に、一群のボランティアが慈濟の月刊誌、録音テープ、上人が公表したビデオを持って、あちこちで茶会を開き、慈濟の物語を話し、菩提の種子を撒いた。上人と縁がある弟子を探すために、みんなが喜んでやっていました。



執行チーム 心の中を振り返って

謝富美

文／陳靜慧

(初代執行長／一九九一年)

一九八〇年、謝富美さんは家族七人で台湾に帰国したとき大きな交通事故に遭い、入院しました。その時彼女は「もし生かしてもらえらば、必ず有意義な事をして応えます」と心から願ひ祈りました。十年後の一九九〇年、親族の訪問に台湾へ

戻った時、ある市場で野菜を販売している女将さんから慈濟を紹介されました。彼女から簡単な慈濟の説明と資料を受け取り、家に戻ってからじっくりと読み、感銘を受けました。

ある日、謝さんが義父にこの事を話すと、義父は「会社の宋篤志さんが慈濟人です」と言われました。そして思いも寄らず宋さんは證嚴上人にお会いできるよう段取りをしてくれました。お会いしたその日のことを謝さんは「初めて上人にお会いした時、上人は、日本から私に会いに来た人達は皆、日本分会をどうやって設立しましたか、日本へ戻り聞いてみますか、言い残し帰って行きましたが、誰からも連絡は有りませんでし

たと言われました」と話され、その時、願いを叶える機会がやって来たと思つたそうです。謝さんは目の前にいる瘦せた上人を手伝う事を決心しました。

日本へ戻り、高層ビルが立ち並ぶ都会を歩き回り、三ヶ月が過ぎた頃、登記申請の許可が下りたと連絡が入りました。「許可が下りた後、上人に電話をしたこの事を伝えました。すると私もよらぬ事に上人は私に、許可されたのなら直ぐに始めるのですよ！」と言われたのです。

は台湾に住んでいます、変わらず慈濟のボランティアです。黒髪の時から活動を始め、白髪となった今も活動しています。謝富美さんは日本分会の永遠の家長です。

張秀民

文／張秀民

(第一代執行長／二〇〇二年)

一九九二年、張秀民さんが慈濟の門をくぐったのは偶然からでした。彼女は浄土法門を修行していましたが、證嚴上人の「普天三無」(世の中に私が愛さない人はいない、私が信用しない



■ 初代執行長の謝富美 (右)



■ 第二代執行長の張秀民 (左)。写真／慈涓

人はいない、私が許さない人はいない」と、仏教を広め衆生に活動する精神に感動しそれが転換点となり、慈済菩薩道に入りました。

当時、張さんは群馬に住んでいました。常に分会にすることは出来ず、重責を担うのは怖い事でした。しかし幸いにもパソコンを駆使して文章を作成し、計画を立てる能力があり、どんな困難にも立ち向かう許麗香さんと、苦しんでいる人をいつも



■ 第三代執行長の許麗香、南山陸町に於いて。写真 / 陳國麟

訪問し慰め救済し、さらに熱心に会員を募る林素子さんから二人が副執行長を担当してくれました。新道場の使用を開始したばかりの時の最初の目標は努力して慈済の教育と人文の教育をする事でした。

張秀民さんより：月曜から木曜までは住んでいる群馬の群馬慈済人の成長に寄り添い、週末は東京に出向き分会の活動に参加しました。歩み続けた中で振り返ってみると、最大の挑戦は東日本大震災の援助活動でした。その時も幸いにボランティアの陳金発さんと思道さんが先発隊として災害の状況を把握してくれました。それに加え台湾、日本両地のボランティア達の無心の援助活動があり、十回に及んだ東北被災地区への見舞金の支給を完了できました。

この三十年を振り返り心の中は感謝の気持で一杯です。上人、家族、全ての慈済の仲間達へ、

本当に有難う御座いました。

許麗香 文 / 許麗香
(第三代執行長 二〇一四年)

日本分会設立から八年、許麗香さんは台湾から日本に仕事で赴任してきた御主人と一緒に来日、その後一度台湾に戻り、一九九八年に再び来日しました。当時日本分会はマンシヨンの一室にあり、小さな部屋に十人余りの委員が寄り添って活動をしていました。少人数ですがとても暖かい雰囲気になり溢れていました。その年、彼女は台湾で受證して委員となり、心の中はどうやって上人の慈悲の心を広げていくか、どうやって更に多くの人に慈済を知ってもらうか、その事で頭の中は一杯だったそうです。

許麗香さんより：歩んできた日々、嬉しくて笑っていた事、悲しくて涙を流した事、色々な

ことがありました。「落紅不是無情物、化作春泥更護花」(自分を犠牲にして、他人を育てる)二十数年を経て、時の流れを忘れ、智慧が更に広くなりました、傷ついた事での悲しみは覚えていません、ただ覚えているのは多くのひとの辛い出来事に遭遇したとき流した涙、そして多くの笑い声に満ちた日々を過ごした事です。

歩んで来た二十三年、心の中はいつも希望に満ち溢れていました。心を強く持ち、毎日慈済の事をしていました。あの時、上人の「要挑天下菜藍」(全世界の苦しむ人を救う)の決心に私は感動し上人について行く事を決めました。初めは善事をするだけで良いと思っていましたが、いつの間にか奥深い仏法の中に足を踏み入っていました。仏法は経を唱えるだけ、と思っていましたが無量義経を勉強し、法華経を知りました。そし

て修行するには六度萬行(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)が必要な事を知り、経蔵に深く入りこみ智慧が海のように広くなりました。困難に対しては我慢する力が必要です。それにより菩薩大道を進む事ができるのです。

夜中に目が覚め自分に問い質す事があります。「私の愛は無欠ですか?」「完璧ですか?」「上人の教えに沿っていますか?」と。心の故郷(花蓮静思堂)から遠く離れた日本にいますが皆様と心をつなげて、愛の心を持って全ての災難に立ち向かいます。人々の生命がより価値のあるよう、智慧を成長させ、上人と心が通じるようになります。

陳金發 文 / 張秀民

(日本分会監督 / 二〇二二年)

日本と縁が深い陳金発さんは日本にも自宅があり、会社も有

ります。一九九六年、初めて三軒茶屋に来て慈済の道を皆と一緒に歩んできた様子を話してからは、常に私たちを気にかけてくれています。三軒茶屋の部屋で会員四十五名が狭い思いをしているのを見ると、現在の新宿大久保の道場を捜すのに協力してくれました。

慈済をまだ知らない頃陳さんは大の酒豪で、奥さんの鄧淑英さんは「母からの遺産を陳さんが證嚴上人に寄付すれば良い」と思っていました。寄付する時は跪いて上人へ差し上げたのですが、陳さんは何故こんな事をしなければならぬのか不思議に思っていました。彼は慈済の本当の姿を探ってみようと思いい、それが思いもよらず、上人に帰依する事となりました。多額の寄付を慈済にし、この大護法はこの時から禁酒し、慈済の国際災害救済活動に参加する様になりました。

慈悲の心が動きだし、陳さんは国際災害援助活動の大黒柱となったのです。上人の歩む道を歩み、上人からの依頼で日本分会の指導、監督の任務を担当する事になりました。それから日本分会のメンバーを連れて各地で発生した大小の災害の援助活動に参加しました。東北地方の3・11大地震の時東北の被災地を奔走し、陳さんは九ヶ月間日本に滞在しました。

陳金発さんはよく国際電話を掛けてきたり、或いは自ら日本に赴き日本分会の発展を見守っています。陳さんの妻、鄧淑英さんも日本分会に参加し、長期間日本に滞在しながら日本の慈済の人と寄り添い、親子班、茶道体験班華道教室、の推進に協力し日本分会の人文の基礎を構築する事

に貢献しました。鄧さんは心温かく、謙虚で誠実です。日本の多くの慈済の人はとても懐かしく思っています。

日本分会に対してエネルギーの満ちた愛で熱い指導、監督をして頂いている事に心から感謝します。上人が彼をここへ導いてくれた事に感謝します。



■ 日本分会監督の陳金發(右2)、陳思道(右1)は3.11活動の中心的リーダーであり、よきパートナーです。

人文教室編 1

人文教室の 縁起とふりかえ

訳 / 佐藤仁 文 / 陳靜慧



1



2

日本支部は 2006 年 1 月に証嚴上人の意を受け、道徳的品性教育、生活教育と完全な人教育を目標理念とし、語学教育の中国語教室と人文教育の親子教室を合併し、「人文教室」と改め、日本の教育制度に合わせて、毎年春と秋に新入生を募集する沿革で今に至っている。

二〇〇七年三月第一回修了式とパーティーを開催し、生徒たちの一年間の勉学について激励し、同時に親、教師、生徒とボランティアの四者で懇親し、四つのクラスの保護者代表を選出し、平日の連絡協力事項の取り決めを行った。

人文の開始 楽しい親子教室

人文教室を始めた頃には、実はすでに長年の教育経験を積み重ねていた。一九九九年に最初に中国語発音教室を設立した。一九九九年ボランティアは三か月の計画を経て、群馬県で初めて手話、寸劇、静思語、中国語、環境などを内容とした「楽しい親子静思キャンプ」を開いた。翌二〇〇〇年には山梨県で親子教室を設立した。

二〇〇二年日本支部は九階建ての新支部を封切り、無数の愛心を集める道場とした。この

年中国語教室を新装オープンして、お試して二日間の親子キャンプを行った。副執行長の許麗香は、わざわざ台湾に戻り多くの資料を持って帰ってきた。二〇〇三年ご主人と一緒に来日した陳靜慧はボランティアに加入したばかりで、年度課程を組む担当となった。靜慧によると「師範学校を卒業したため、教育に対する使命感があった。その時は慈濟をよく知らなかったが、沢山の参考資料があったのとまた絶えずネットから慈濟の国内外の学校の情報を検索取得し、中に立って自分で学習しました。」

執行長の張秀民は準備計画をする会議の中で説明した。「慈濟の人文精神を以って子供を教育指導し、受講生が身心健康で、「自利利他」の小菩薩になることに期待します。」この時から、東京の大会の一角に日本支部が落成し、新しい使命感と夢が

あることにボランティアたちは喜び、興奮した。二〇〇四年組織規約が確立した。毎月一回、人文教育を主軸とした楽しい親子教室のために公式に募集をして、正副執行長が教室の主任を担当した。

毎月の課程では異なるテーマがある。例えば七月は「慈悲」、蚤の市課程では、物を惜しむこととお布施を教育指導し、活動の最後に、蝋燭の周りを巡る中、大人と子供が順番に前に行き一日の所得を寄付し、硬貨が地面にぶつかる音は、正に愛の力スタネットである。十一月のテーマの「行善」では、新宿御苑で

毎月一回の親子教室では、人文教育と親子活動を主軸としていて、二〇〇六年、中国語教室と合併後は、授業が毎週日曜日に変更となり、教育課程も中国語教育を主とし、人文課程を副とした。

専門教師陣 親切で優しい教育

二〇〇年、河村吉美が課程の設計を引き継ぎ、その後中国語熱が盛んになるにつれて、二〇〇八年には中国語教育を研究している李彩蓉先生を招き入れ

た。河村が言うには、私と李彩蓉先生はネットを通じて、また中華レストランを訪れた、近くのコミュニティにポスティングをし、宣伝と生徒募集を拡大した。その効果は現れ、二十人余りの生徒だったものが六十人以上に増加し、クラスも増え、児童教室が十クラス、成人教室が三クラスになり、同時に多数の中国語講師を招いてクラスを担当してもらった。

人文課程方面では課外の時間として将棋、書道など、静思語の時間は全年齢合同での教育を実施する企画を行った。三月には授業参観日と授業説明会を開催した。九月に台湾の教聯會から来た林美雲先生はここ半年間静思語布板戯「親孝行の子豚」を指導演出する為に企画をし、その発表会では生徒、保護者、教師百六十人余りが手話、歌、静思語の暗記、新劇を演じた。

二〇〇九年生徒は増え続け、午後の時間は故事成語、中国結

■ 1 群馬親子キャンプ
写真 / 日本分会提供

■ 2 「快樂小天使」の歌を教えている。
写真 / 慈涓

■ 3 フィリピン国の災害募金に子供達が頑張っている。 写真 / 日本分会提供

■ 4 成果発表の日に先生にお祝いと感謝の気持ちを生徒たちが伝える。
写真 / 日本分会提供



■ 1 大愛ママの屋外活動の様子。
写真／日本分会提供

■ 2 親子教室のお母さん方に慈濟真善美花道を教えている鄧淑英。 写真／慈涓

人文教室編 2

大愛ママの 歩みと回顧

訳／鄭文秀 整理／陳雅琴

勉強の日、それぞれ違う役割を担うボランティアの姿を目にします。先生達の良きパートナーとして、更には生徒と保護者の三者間の橋渡し役としても担っています。この中国語クラスのボランティア群は、正式名称「大愛ママ」と呼びます。

日本分会人文教室の三十年の間、物換星移しても唯一変わらないものはボランティアのメンバーではないでしょうか。これこそが、慈濟人文教室中国クラスが他と違うところでもあります。

大愛ママボランティアの育み

證嚴上人は、「大愛ママとは、母親の心を持って、他の子どもに面倒見て、菩薩の智慧で自分の子供に教えること」を説いています。二〇〇四年、日本分会にて親子クラスが開設され、六歳から十二歳の子とその親を対象に集いました。家族につれて来られた就学前の幼児には、ボランティア劉

桂英の考案で始まった幼児班の課程が織り込まれるようになります。同じくボランティアの王昆今と数人のボランティアと共に、週末に両親の母語学びに励む未来の主人公たちを見守って来ました。これが「大愛ママ」の前身です。

二〇〇五年、ボランティア鄧淑英により開設された慈濟真善美花道班は、五年の歳月を経て、花道以外でも、慈濟志業である四大志業・八大法印を説き、特に「教育」の大切さを話し、花道班の生徒たちは励みを受け、それぞれ違う役割のボランティア活動をするようになっていきました。藤本裕子と潘秀鳳、郭惠珍は、二〇〇九年「大愛ママ」に加わりました。

二〇〇九年から二〇一二年の間、人文教室は規模を広げ生徒募集を行いました。教学スタイルが多元化し、ボラン



■ 中国語教室の中で通関の会話の認証テストを行う。

日本語などの才能と技能課程を生徒または保護者に課外活動として選択するように提供した。五月には埼玉県に赴き三日間の野外親子キャンプ活動を実施し、野外炊事、大地ゲーム、宝探し、星座観察など娯楽教育をしました。十月静思語教育は、全ての児童教室を共同授業方式で実施するように変更した。

二〇一〇年師範学院を卒業した陳詩萍先生が陣容に加わ

り、中国語と静思語に参加し、共同教育を行った。詩萍は九二一地震の縁で慈濟を知ったため、その後は教聯會の先生になり、結婚後来日し東京に定住した。人文教室のボランティアに加わったのち、教務と企画を一緒に担当し現在に至っている。

通関と認証ゲートで待機

二〇一二年再度ご主人の異動で日本に帰ってきた陳靜慧帰国チームは、引き続き行政、教学各主管の職務を推進し、専門の業務を分担と合心の教育チームの理念を立てた。十月から始め、毎月一連の「慈濟認識」の課程を企画し、ボランティアを招き、近距離で共有した。ボランティアたちは経験者の身分で、常に保護者方に注意喚起をし、子供たちに中国語を多く話させ、家事をさせ、台湾にも帰らせ、慈済にも来させ、人と人との人文のマナーを学習させた。

二〇一三年五月に授業の前に「静思語合言葉通関」を実施したこと、ボランティアたちは毎回授業の日には支部の玄関で子供たちを待ち放課後は「朗読認証」を推進し、ボランティアと保護者が先生の授業の後、生徒たちは順番に並んでテキストを読み上げた。それは今でも最も暖かくて感動するシーンです。

二〇一五年、日本の3・11地震の縁で認定されたボランティアの陳雅琴が、行政およびイベントの計画に参加しました。二〇一六年、彼女は美術館を訪れ、野外農業のためにサツマイモを掘る課外授業に親しむことを計画しました。平日は、書類作成、名簿管理、教育支援、教材管理などはもちろん、または、「竹筒歲月」に呼応するために保護者に牛乳パックの貯金箱を作ってもらうように全力投球しています。過去十年間、多くのボランティアが無私の奉仕

と愛情を通してこの教育の庭を作りしました。「私の子供は大きく変わりました。子供は家で積極的に中国語を話し始めました。」「私は遠くに住んでいます。」「子供たちが慈濟基金会のマナーと人文を受け入れることができるようにここに来ています。」「慈濟は心から保護者と協同しコミュニケーションを取り、私たちの心を豊かにし、機会があれば奉仕したいと思っています。」「すべての話しは最高の贈り物です。

子供達よ、苗を待っている庭師のグループだったらいのにと思います。出会う度に、「親恩」、「慈悲」、「布施」等の苗木を選びました。あなたは小さな蝶で、空を突き抜けてここにそっと着陸します。何もお願いする事はありません。あなたの到着を待ち続け、この土地の香りを一緒に嗅ぎましょう。



ティアも増え、クラスの成長を後押しし、生徒保護者にも呼びかけ、ボランティアと組み、愛心パパ・ママが結成されました。学童の安全ケアの他、教室の装飾や先生と協力し、家庭学習サポーターとして先生と生徒そして保護者間の良きコミュニケーション役を担いました。

藤本裕子が率いるチームは中国語クラスの初代「大愛ママ」となりました。藤本はクラスの日の当番表を始め、各種活動、例えば読書会や、花道や手話などの企画を常に入念に準備し、保護者とボランティア一同を率いて、共に子供達と一緒に成長していきました。その過程で共感し保護者の立場から慈済ボランティアの立場へと転じた方々もいます。

ボランティアの潘秀鳳は早朝から教室の清掃を始め、昼食の用意、又二〇一三年に始

まったクラス開始前の静思語関門認証は、彼女が楽しみな仕事の一つです。病いの痛みを乗り越え、この活動ができる有り難みを噛みしめ、今に至っても任務を全うしています。

全力支援のバックサポーター

幼児班クラスを常にサポートして来た郭惠珍は、子供達の間もしくは人・物事の間には、時々突発的な出来事に見舞われることがあるが、この時こそが臨機応変の力が試され、「愛と忍耐がなくては出来ない。大愛ママにとって最も大事、大切なことです」と言いました。現代社会の複雑性もあり、各々異なる家庭から集う子供達と接していかなければならず、いかに教育は容易くはない分野であるかが分かります。

大愛ママの仕事とは、授業

料の収集の他、保護者からの質疑応答やクラス生徒の情緒ケアがあり、更にクラス前の関門認証、中国語達人認証、授業後の教室清掃やその後の見守り、参加生徒や保護者への声かけなどがあります、各々が小さな事柄でも、人文教室には欠かすことができない大事な役割です。

ボランティア王昆京は、二〇〇四年を始め、無数の冬と夏休みを経験、二〇一二年に職場を引退したのをきっかけに台湾へ一時帰国し、その後タスキは劉桂英へと渡されました。そのタスキは今や十年目を数え、臨時スクーターから全力バックアップするに至ったボランティアの劉桂英は、そのご縁から、今日を繋ぐ下支えする存在となりました。

劉桂英は勤務の関係上、週末のみしか参加できず、それでも日曜日の人文教室だけの

為に、九年間、毎週日曜日は平日勤務の如く朝から家を出ては、クラス前の関門や保護者からの質疑応答に対応しつつも、生徒を励まし、達人認証を導入し、授業後の教室清掃などの後仕事を担ってきました。日に日に成長していく子供達の姿を見て、数々の喜びを味わって来た劉は「中国語クラスで大愛ママになってからはそれも生活の一部となり、子供達を自分の孫を見るように嬉しい」とほほ笑みます。

長く続く 愛の証

林瑪莉は大愛ママ相談窓口を担って、すでに十年を数えました。七階の教室を常に見守り、時々仕事で北海道へ赴くこともありながら、クラスのある日の前日には東京へ戻り、任務を全います。

何嘉鈴は、何があっても人

文教室の活動を優先し、大愛ママへの参加は後まわしでも、クラスの日には早朝から関門で使用する文房具を準備し、七階の幼児班の裏側で先生と生徒を見守ってきました。

人文教室に求められる様々な変化に対応する為、大愛ママグループも絶えず調整が試みられています。先生方、また分会にとっても最強なサポーターとして、保護者の方々が安心でき、子供達にとっても中国語を学ぶに良い環境を

■ 1 中国語クラスで保護者さんたちに手話を教える藤本裕子。写真/河村吉美,

■ 2 子供達が生けた生け花と一緒に写真に写る大愛ママ達。写真/陳俐頻

■ 3 受け付け業務をする大愛ママ。写真/吳憶鈴

■ 4 父の日に手作りのメッセージカードを子供に配っている大愛ママの陳雅琴。写真/慈涓

整えることが目標です。課外授業がある際は、特に大愛ママが居なくてはならない存在です！
今年日本分会は三十周年を迎え、人文教室も同じく三十周年を迎えました。初期を回顧すればするほどいい思い出がいっぱいです。かつて劉桂英と王昆京に連れられて中国語を学びに来たお孫さんも今や立派な大学生です。ママはあばボランティアは、見る見るシルバー色が増え、動きも体力も衰えてきました。但し、歳月の移り変わりにも動じることがないのは心。当初保護者だった立場から慈済ボランティアの一員となったり、先生となったり、そして卒業生が休みを利用し、大愛ママと一緒にサポーターとして活躍されたりするのを見ると、他でもない、それこそが愛の伝承、そして愛の証そのものではないでしょうか。



人文教室3

私達はここで成長する

人文教室を通じて、子供だけでなく多くのボランティアの方も成長していきます。ここでは八名のボランティアの方が、人文教室のおかげで人生の幅が広がり豊かになりました。



河村吉美

(二〇〇六年 委員になり)

一九九一年、広尾にあった中正堂会館で慈濟華語正音クラスを開設されました。河村吉美さんは劉秀菊先生からの紹介で、慈濟とのご縁が出来ました。

二〇〇二年、分会は大久保に移りピンイン(拼音)クラスを設立、「静思語」を授業に導入し始めました。二〇〇七年、生徒への増員募集により教職員の人手不足が生じ、河村さんは授業のほか、教務や雑務を兼務することになりました。教育活動に必要なポスターやマニュアルをデザインや編集から仕上げまで一から学び、自分の手で作り上げました。河村さんは作りから学び、学びから気づきの過程で、「二分一秒を無駄にしない、一歩一歩を確実に歩む」を痛感

していました。今を大切に最大限に力を尽くすのは、河村さんが自分を激励する座右の銘となっています。

陳靜慧

(二〇〇六年 委員になり)

二〇〇二年、陳靜慧さんは台湾駐日本代表處的婦人会の方に同行されて慈濟を訪れました。当時ボランティアの許麗香さんが、大久保に移ったばかりの慈濟東京分会に人文教室の親子クラスの開設を考えていました。陳さんはその誘いを受け、責任者として企画を担当することになりました。中国語の授業を主とした「中国語教室」と親子の人文活動を主とした「親子クラス」の並行運営から、二〇〇七年に「人文教室」の一括運営に変更して現在に至ります。

教師からボランティアにな



■ 1 河村吉美 (右) は子供達に切紙細工を教える。
写真／日本分会提供

■ 2 静思語の意味を聞かれている陳靜慧(中)。
写真／慈濟

■ 3 子供達に熱心に教えている羅文伶。
写真／日本分会提供

■ 4 子供に静思語を教えるのが大好きな黄韻璇。
写真／陳文絲

■ 5 人文教室で頑張ろうと決意した陳偉權。
写真／于舒馨

る道は陳さんが自分の人生の可能性を広げた過程でもあります。慈濟の人文教育の目標は子供たちの心を開き、自分を愛し、他人を愛し、万物衆生を愛する人間になることを強く信じています。陳さんにとって最も為になる證嚴法師の言葉は、「子供への教育は待てない」、「愛があれば何の心配もない」。

羅文伶

(二〇一五年 委員になり)

二〇一二年三月、二十数年ぶりに分会に戻った時、羅文伶さんは「誰かに誘われたり、誰かが私を必要としたら、私は必ずや全力で自分の使命を果たす。」と決意しました。

羅さんは一貫して「志業」への分担に対して、「必要があれば、何処へでも行く」と心がけて続いています。人文教室の教師および雑務を担当した

後「如何に子供たちが授業内容を好きになれるか?」、「教師の私は子供たちに何をしておげられるか?」、「如何に人文的カリキュラムと中国語の教育を統一するか?」など、思案をめぐらしましたが、とにかく始めてみようという行動に移しました。最初の一步を踏み出せばすべてが難しくありません。正しいことをするだけです。羅さんはずっと慈濟の菩薩の道を歩みつづけ、あらゆる良いご縁を結んでいきたいと思っています。

林偉權

(二〇一六年 慈誠になり)

慈濟と深いご縁を持つ林偉權さんは慈誠になった後、人文教育にボランティアになれるように願掛けをしました。当時、林さんには、トルコにあるマンナハイインターナショナルスクールの記事に深

く感動し、子供たちは純粋であるから与えられた生活環境にあった成長をしていくであろうと信じました。ですから慈誠になった後、人文教室で尽力しようと決心しました。現在、教える過程の中で自分を磨き、そしてさらに学び続けます。

黄韻璇

(二〇一五年 委員になり)

黄韻璇さんは慈濟の三代目であり大学時代から慈濟青年ボランティアに参加していました。その後「大愛ママ」として台北の万華区で「静思語」を学校で子供たちに教えました。黄さんは、陳靜慧さんの紹介で慈濟人文教室の、静思語組の一員になりました。

二〇一九年に人文教室の教師になった彼女は、静思語の「自分を過小評価しないで、人には無限の可能性があるから」



■ 1992年11月から発行されて今に至った隔月刊誌。写真 / 慈涓

隔月刊誌の思い出

慈濟日本支部は、今年で三十周年を迎え、日本慈濟世界（隔月刊誌）も発刊二十九周年を迎えた。

訳 / 岩村益典 文 / 王秀寧

一九九一年に日本支部が創立し、翌年一九九二年十一月、證嚴上人の題字による「日本慈濟世界」第一期が正式に出版された。本誌は、現地の会員が日本の慈濟をよりよく知ってもらい、寄付者リスト（寄付者と寄付額）は正しく忠実に公開されるべきだという信念により、上人の同意の下隔月刊で発行される事となった。A3両面で、ボランティアの劉桂英さんと王昆京が昼夜を問わず、原稿と寄付金額を校正しタイプライターで行ずつ打ち出し、一段落ごとに糊で貼り付けて作成した。今日のコンピュータ化された作業からは想像できない、熱意と忍耐力がなければ続けられないが比類のない達成感が得られる作業ではあった。そして、前執行長の張秀民と現執行長の許麗香が、この隔月刊の雑誌を温かく支えて続け

た一九九八年、魏瑞芳は、支部の古いマッキントッシュコン

ゴールのないリレー

創刊号は三百部印刷され、二年後には千部印刷された。現在は環境保護の観点もあり、毎号千四百部印刷している。編集チームは、作業の各段階で様々な才能を集め、それぞれの時代の変化に応じて成長し、本誌を現在の形にしてきた。



■ 手話の練習中の楊紅衛（中）写真 / 慈涓



■ 王曉紅（左1）と魏國斌（録画）のご夫婦。写真 / 陳文絲



■ 陳玲韻（右）のご家族。写真 / 李月鳳

子供や生徒たちにも伝えたいと思っています。また、子供たちに愛と善の種を広げていけたらとも思っています。

楊紅衛

（二〇一七年 委員になり）

楊紅衛さんは娘の小学校二年の夏休み前に、中国語を学ばせたいと思ったのがきっかけで慈濟と出会いました。「中国語だけでなく人文も教えている」が、楊さんの人文教室に対しての第一印象でした。その後、その年に開催された親子三日間キャンプに参加したことで楊さんは子供にこの教室で勉強を続けさせようと決心しました。一年後、隣人の家の火事に巻き込まれたものの、その時多くの親切な方や慈濟ボランティアの方に助けられ、機会があれば自

分も人を助けようと心に誓いました。数年後、楊さんは慈濟の委員となり、多くのの方々に愛を伝えていきます。

王曉紅と魏國斌

（二〇一七年と二〇一六年 委員と慈誠になり）

王曉紅と魏國斌ご夫婦は子供に中国語を学んでもらいたいと、楊紅衛さんに慈濟の人文教室を紹介してもらいました。意外にも子供が慈濟にすぐに馴染み、とても気に入りました。

毎週日曜日、子供が授業を受けている間にご夫婦は慈濟の様々な活動に参加し始めました。活動の中で経験豊富なボランティアの方の経験談やビデオを観て夫婦は深く感銘を受けられました。證嚴法師の指導の下、常に感謝の心を持ち人と触れ合うことの大切

さを感じました。ご夫婦は現在ご縁を大事にし、慈濟という大家族の中で自分の才能を発揮して、社会に少しでも貢献しながら、自分の「慧命」を果たしていくことを望んでいます。

陳玲韻

（二〇一六年 委員になり）

陳玲韻さんは、子供たちにもっと中国語に触れてもらいたいと、二〇〇八年に五歳の息子を人文教室に連れて行きました。分会のボランティアの皆さんの優しさが、異国の地にいる陳さんには何時もとても暖かい実家に戻ったような気持ちにさせてくれました。『ご縁は深い限りでは遅れを恐れない』委員になったのは終点ではなく使命感の始まりです。





- 1 金子昭教授（左）が慈濟を訪問。写真／林真子
- 2 編集グループの様子。写真／劉怡君
- 3 現在台湾にいる、創刊時に携わった編集チーム。写真／慈濟
- 4 校閲中の中文グループと日本語の翻訳グループ。写真／慈濟
- 5 印刷会社の滝吉道信さんもボランティアに加わって、皆さんが心強くなった。写真／慈濟



（個案報導）、寰宇慈濟のほか、特集として、二〇〇九年一〇二期から二〇一一年一二期までの「ECO 特集」や二〇一〇年一〇五期から五期にわたる「日本之美」などがあった。二〇一二年第一一七期に「素食料理教室」が始まった。もとは慈済が出版したベジタリアン料理のレシピをテンプレートとして、支部ボランティアが試作し写真も掲載したものである。二〇一三年以降、二〇一六年八月まで望月春江がレシピを書いていたが、その後、専任者不在のため数年間の休止している。二〇二〇年からは、毎月、いろんなレシピを紹介しており、「わたしのベジタリアン生活」では、お気に入りの野菜料理を紹介し、ベジタリアン生活のヒントを伝えている。さらに、二〇二〇年十月より追加された「暮らしの中の仏教」では、大愛テレビの番組「癒しの果実」から抜粋して、仏教の智慧を身近に感じら

チーム

二〇〇七年以降、本誌の編集チームはさらに小グループに分かれ、テーマ設定、原稿の事前決定、原稿の募集と校正、版面デザインなどそれぞれが担当するようになった。毎月、編集会議では、前号のミスや読者の声を確認し、予定している原稿について執筆者と担当者を討論して決定した。

編集チームには、中文グループ、日本語への翻訳グループ、デザイングループがある。中国語原稿の初校、再校、最終校の校正作業、日本語翻訳、翻訳最終稿とプロセスが決まっている。デザイングループは、中国語と日本語で書かれた最終原稿を受け取り、割り付けデザインして印刷する。

ピューターで本誌の編集を始め、その後、新しいコンピューターと大型プリンターを入手して自宅で編集するようになり、二〇〇一年からカラー版を出版した。中山礼秋が引き継いだ後は、小冊子として発行され、二〇〇四年に吳惠珍が加わってから、雑誌として発行された。

二〇〇九年、日本語翻訳チームのボランティアである楊怡芬が編集チームに加わった。彼女は日本語翻訳の整理などを担当し、隔月刊誌や記事を翻訳するため、多くの優秀な日本人翻訳者を採用した。翻訳はほとんどが独立して行われており、お互いに面識がなかったため、翻訳者によるミーティングを行い、翻訳の難しさや特別な言い回しなどについて意見を交換した。

二〇〇九年から、固定記事の主題報導、活動報導、社區報導、人文教室、志工身影、娑婆人生

そして、ボランティアによるチェックを経て、印刷所に送る。印刷が終わったら、沼田青実が本誌を封筒に入れて一刻も早く投函するため、五、六人のボランティアに支部に来てもらうようお願いかける。このボランティアグループの、舞台裏で本誌を、会員の手に時間通りに届けることができるのだ。

特筆すべきは、印刷会社のオーナーである滝吉道信さんだ。彼と本誌との関係は十七年に及ぶ。初めは単なる業務の関係のみであったが、彼は慈済の活動に賛同し、料金も最低限になるようにし、後には割り付けデザインのボランティアとなり、常に編集割り付けの最終段階で、日本語原稿を校正するなどを行ってくれた。彼の謙虚な性格にチーム一同非常に心が安らいだ。

共有と反響



■ 6 伊佐（右）さんと原口（左）さんが日本語の翻訳を校閲している様子。写真 / 慈涓

■ 7 張濟梅さんは現在シンガポールにいる、数十年間に渡って、デザインや編集を今も続けてくれている。写真 / 許麗香

■ 8 「ECO 特集」の「ぞうり」の作品と留学生。写真 / 陳文絲

■ 9 「ECO 特集」の牛乳パック再利用で作った小物入れ。写真 / 劉怡君

■ 10 印刷された隔月刊誌の発送作業中のボランティア。写真 / 慈涓

隔月発行の本誌により、既存会員は日本支部の活動や感動的な物語を知ることができ、また、日本の慈済関係者にとって、本誌は新しいボランティアとの出会いの場となり、さらに、慈済を初めて知った人に、本誌は慈済の世界を垣間見せ、善意を喚起する。

二〇〇三年に、日本の刑務所で服役している台湾人に本誌を送付した。その後、他のアジア系の受刑者からも申し込みがあり、現在では一号あたり約二十部を各地の刑務所に定期的に送っている。多くの受刑者が慈済の活動と考えに触発され、刑務所から慈済に現金や物品を送ったり、チャリティセール用に絵画を寄付したりしている。

現在、台湾のボランティアである王琳恩は、二〇〇九年、借金のためやむを得ず麻薬を日本に持ち込み、入国時に摘発されて六年の懲役刑を科せられた。

服役中に本誌に出会い、毎号ワクワク感動し、慈済のボランティアと手紙のやりとりを始めた。自由を奪われても歯を食いしばって生き延びる事ができたのは、ボランティアの人たちの励ましがあったからだという。当時、隔月刊誌で報道された3・11の救援活動で、見返りを期待せずに与えるボランティアの無私の心に感動し、自分の犯した過ちを大いに反省し、出所して台湾に戻ったら慈済のボランティアになろうと決心した。ボランティアとなった王琳恩は、環境保護や医療、刑務所訪問などの活動を行った。最初の頃は、自身のこと記されている本誌の一四八号（二〇一七年）を持って刑務所を訪問し、受刑者に自分の体験を伝えた。

生と死の狭間で

ある重い病気で生きる意志を失った人が、電話で支部に救い

を求められることを本誌で知り、支部へ電話した。この件は支部のケースとなり、その後、台湾慈済が引き続いてケアすることとなった。彼女は、慈済のボランティアになる決意をした。彼女は、人生の最後に慈済に寄り添われ、愛と希望に満ちて病で世を去ることができたのだ。

その他、本誌のおかげで魔の手から逃れたという驚くべきケースもあった。ある世間知らずの少女が、台湾で日本で働く求人に応募したが、それは悪質な人材派遣会社であった。パスポートは預けられ、日本語もわからない状態であった。そのとき偶然、トイレにあった本誌を見て、支部に電話で助けを求めた。慈済のボランティアは、茨城から彼女を支部まで案内し、派遣会社と交渉し、さらに彼女が台湾に戻る資金を集めた。

編集者の苦労

分を見せてくれ、メンバーは、プレッシャーから解放され楽しい時間を過ごす事ができた。編集の慈涓は、新しい人に記事を書いてもらったり、チームに参加してもらったりする方法を常に模索しており、日本を離れても、インターネットを通じて編集作業に参加する事が求められた。遠く離れていた心には甘い負担だ。頑張り屋さんの静慧は、いつも寝不足で勇気を持つて事に挑む。詩萍先生は、流暢な文章を書く優しい先生で、割り当てられた課題を必ず時間通りに提出してくれる。雅子さんは、海外在住が長いが、大変な日本語翻訳をしても笑顔でこなし、笑い声が聞こえてきそうだ。

最後に、本誌がよりダイナミックで活気ある記事で満たされるよう、コロナ禍の後に新しい血が入ることを期待してやまない。



人文真善美の 縁起と振り返え

證嚴上人曰く、「話せる、書けるなら、文章も作れる」
ため、人々は慈濟の歴史を残すべきであると。

訳／吳翕輝 文／陳靜慧



■ 1 陳文絲氏（右）は2009年に人手不足で経験がないのに急遽人文真善美志工の撮影担当になった。訓練を経て、今では一通り担当出来るようになりました。陳雅琴氏（中）は2013年に人文真善美志工の編成を手伝い、支部だけではなく、各地での活動を担当するようになりました。写真／慈涓

■ 2 人文真善美留学生ボランティアの陳仁暉（左奥1）と洪晟瑞（左奥3）は沢山の資料や映像の技術を伝達してくれた。写真／許麗香

■ 3 留学生ボランティアの張馨云は3.11被災地と一緒に行き映像を残してくれた。写真／慈涓



■ 4 より高い技術を習得する為の勉強会。
写真／慈涓

■ 5 張秀民（左）と陳靜慧（右）は活動の
記事を素早く良い文章にする。写真／陳文絲



日本支部が設立した当時から、書き続ける一本の筆が、三十年來の活動を記録として残してきました。それが二代目執行長張秀民氏です。一九九一年の成立直後から広報部として、実際の対話や会話を文字で、さらにはカメラ等で記録を取り続けてきました。

曾碧雲氏は支部の草案作成から第一回大会の流れを撮影し、アルバムにしました。一九九七年には、林素子氏が三軒茶屋での活動を録画し、初めて日本支部に文章と画像が揃いました。一九九八年に台湾の大愛テレビの放送が開始され、素子氏は研修で台湾を訪問しそこで、録画時の画角の大きさを学びました。その後、彼女はDVで支部早期の活動を録画し続け、文章と共に大愛テレビに郵送しました。当時はインターネットが未発達でしたので、重要な出来事はまず電話で連絡し、その後

は映像と文章で報告すること、師父や他の慈濟メンバーにも日本支部の状況を説明しておりました。

文学女子の正副執行長

二〇〇二年、張秀民氏は執行長の役に就いても、文学少女かつ出版経験もある彼女は、毎回慈濟の活動から、群馬の自宅に戻る三時間の電車で文章を仕上げ、自宅からボランティアにメッセージしていました。

同じく文学少女で書くのが好きな許麗香氏が副執行長の役に就くと、それからは二人で一緒に慈濟日本支部の歴史を文字に残してきました。初期の支部はボランティアだけでなく、実際の委員も数人程度しかいませんでした。そこから三十年たっても、二人は日本支部で最も忠実に献身的な慈濟文学少女であります。

慈濟人文志業は二〇〇三年

に始動し、「人文真善美・三合一」を始めました。人間の真の美しさを紙媒体や映像等で記録に残すのが目的です。それを聞いた證嚴上人からは、「文章、画像、動画が有るだけではなく、人間の真実、善意、そして美を求める姿を表現すべし」という言葉を頂き、「人文真善美志工」という正式名称で起動しました。

二〇〇三年、国文科卒の陳靜慧氏は夫の仕事の都合で来日し、初めて慈濟でボランティアをしたことを記録に残すことになりましたが、感動のあまり涙が止まりませんでした。同年、新委員の吳惠珍氏は、メディア制作と展示会運営の経験を元に、カメラ・ビデオ担当のみな、二〇〇年以來、日本支部の紙媒体からインターネットのクラウド環境までの守護者となりました。

慈濟を支える曇りなき青空

慈濟の人文記録が増えるごとに、バラバラだった資料の管理、収集、編集、編成、画像形式、動画フォーマットなどに対して、一定の管理基準を決める必要が出てきました。

二〇〇五年から二〇一一年に、沢山の留学生がボランティアとして参加してきました。ITに強い若い世代からは既存のソフトウェアの統一化と媒体の電子化を促進してくださいました。洪晟瑞と陳仁暉はデータと撮影に強く、人文真善美のリーダーを歴任し、さらに多くのボランティア達に、撮影や録画方法などの育成に努めました。

大災害と地区歴史

二〇一一年3・11東日本大震災は世界を震撼させた災害でした。被災地を援助するために日本のボランティアだけでは



■二〇一五の手話劇父母恩重難報経より。写真／葉守仁



日本支部の経蔵手話劇の振り返り

慈濟の経蔵演繹はスケールの大きな創作手話劇です。それは仏教の経文と教義を衆生に広めるため、經典である偈文（仏教の詩句）の手話劇です。

訳／王珠惠 整理／黃韻璇

二〇〇五年と二〇一五年の手話劇「行つは難し親孝行の仕方」

日本支部は手話劇「行つは難し親孝行の仕方」を二度上演しました。初回は二〇〇五年の新宿文化センターで上演しました。日本で上演する経験がないことや人手不足のために、台湾から二十名以上のボランティアが支援に来られました。二〇一五年二月には杉並区の杉並公会堂で二回目の公演を行い、毎年恒例の祝福感謝会に併せて手話劇が上演されました。



■手話劇の中の一幕。写真／李月鳳

三月十一日から四年も経ったが、人と人の「ぎずな」がどんなに大事かを感じて、多くのボランティアが集まってきました。宮城県東松島市、石巻市の被災地から二十七名、三重県、愛知県、静岡県、関西から三十名、山梨県、群馬県から二十名のボランティア、華僑の貴賓や留学生、慈濟国際医療団日本支部設立の医師、中国語クラスの父兄や教師、そして学生などで総勢二一五人が参加して、十曲の手話劇を共演しました。

その頃は「法釋」と「演繹」



■6 留学生の朱家立は撮影、画像編集、録画等に協力をしてきている。写真／慈涓

■7 大阪の人文真善美のボランティアは撮影と録画技術の勉強中。写真／慈涓

■8 撮影ボランティアの林金勇は日本にいる間献身的にサポートをしてくれた。写真／慈涓



■10 活動の後に編集作業をする人文真善美のボランティア。写真／慈涓



■9 熱心に勉強する撮影の邱淑恵。写真／簡淑絲

なく、台湾から来た大愛テレビを含むスタッフや、日本各地から愛を持つボランティアが続々と手を上げて、一緒に現地に向かいました。これは前例のない衝撃的な出来事となりました。

二〇一二年、呉惠珍と陳靜慧より良い記録を残すためには、より多くのボランティアと共により高い専門知識が必要であると感じました。そのため、台湾の大愛テレビ局を通じ、専門人材の打診とともに、テレビ局の本格的な技術を学ぶ場を用意しました。こうすることで、単なる素人の一企業の記録という面だけではなく、出来事の本質や人間の美しさにせまるストーリーなど、よりテレビ放映に近いものへと質を高めることが出来ました。

二〇一三年四月から日本支部で一年間、行われました。二〇一五年には日本の各地域のボランティア達も参加し、特定の場所のみならず、日本各地でも

同じ質の記録を取ることが、出来るようになりました。

一分一秒とも歴史の中に

人文真善美ボランティアは「最初に入り、最後に出る」というチームです。活動が始まる前から人文真善美ボランティアは記録を取り始め、活動が終わるや否や、原稿作成や編成編集作業に入ります。現代のIT技術を活用するだけでなく、人の目を持って伝えたい言葉、画像や映像を適切に正確に記録に落としていきます。

歴史の記録者と守護者として、初期段階の情報を取捨選択せずにすべて残す方法から、今では多目的媒体から情報を効率良く取得し分業して作業出来る様に改善して来ました。ただ、まだまだ伝えたい、記録に残したい出来事は沢山ございます。今後ともますます精進してまいります。



5



4



6



7

■ 4 女性ボランティアによる「圓夢」。写真 / 韓學碩

■ 5 「鑑真和上」のアニメ動画。写真 / 簡淑絲

■ 6 東北の3.11 震災の写真展を被災地で行う。
写真 / 邱淑惠

■ 7 男性ボランティアによる「行願」。写真 / 簡淑絲

二〇一三年大愛テレビ局は「鑑真和上」の動画を制作しました。慈濟（ツーチー）日本支部はこの動画を日本各地で放映し、特に東日本大震災の被災者に鑑真が「命を惜しまずに仏法を広めた」精神を伝えました。東京支部は被災者に愛と寄り添いのメッセージを送り、復興に向かって勇敢に踏み出して欲しいと願いました。二〇一九年八月二十五日は、東京都四谷区民センターで動画と手話劇を上演

演繹は演技ではなく伝法の一つであり、『法髓の良い移植』だと證嚴上人は諭しました。日本支部の三十年間には多くの感動があり、参加して經典を学ぶことで人生観が広がり、仏法の教えが生命に注がれました。



1



3



2

■ 1 祈福感恩会にて無量義經の手話劇を披露するボランティア。写真 / 李月鳳
■ 2 東北から来た3・11被災地の方々とお茶会。写真 / 葉守仁
■ 3 来場者が福慧紅包を見て中身を
読んでいる。写真 / 陳文絲

のシーズが育っていたので、演繹練習に入る前に「法繹を共に修行」しました。まず上人のお話と法繹シーズの体験談を聞き「行つは難し親孝行の仕方」の心境になります。初めて共演する為に、経蔵に入る前に心と口を清めて、自ら素食を実践することで地球を救う意義を学び、「心誠実にして断食する」儀式に入ります。

公演当日は七百人の観客と二百人以上の共演者が親孝行の大切さを体験しました。手話劇終了後に証嚴法師の福慧紅包（祝福コイン入り赤包）が渡され、過去に感謝し天下の無事を祈りました。手話劇を通じて「ぎずな」が生まれ、親子関係や家族

の倫理観を見つめ直しました。

二〇一七年祈福感恩会
「無量義經」

慈濟五十周年と日本支部二十五周年を記念して、二〇一七年の祈福感恩会「無量義經」手話劇に向けてオープニング曲である「鐘と太鼓の共鳴」の練習に励みました。また「無量義經・徳行品」は一〇八人で共演しました。出演者は事前の讀書会で偈文の歌詞を学び、日常生活に生かしました。

張秀民前執行長はブツダの經典の真髓である「無量義經」は、現代社会に適していて、仏教精神を理解する上最も良い教本だと言いました。これを読めば経蔵の境地に入り、善の心で慈愛を実践すれば清らかな社会が作られると話しました。

二〇一九年「鑑真和和尚」アニメの東京放映

同年七月からツーチー日本支部は「行願」と「圓夢」の練習を始めました。九月二十一日から二十三日に宮城県東松島市と多賀市で手話劇を上演し、東北大震災写真展を同時開催しました。男衆は鑑真和上の揺るぎない意志を「行願」で表現、女衆は「圓夢」で優しい意志の強さと夢を手話で演じました。

日本人にも良くわかる演出だったと護国寺修養会の佐藤静慧は絶賛しました。東京支部が酷暑の中大変ご苦勞様でしたと話され、演出では偈詩の清らかな様や広がる雲のようだと称賛しました。

演繹は演技ではなく伝法の一つであり、『法髓の良い移植』だと證嚴上人は諭しました。日本支部の三十年間には多くの感動があり、参加して經典を学ぶことで人生観が広がり、仏法の教えが生命に注がれました。



■ コロナ禍の代々木公園での手作りのおにぎりと食糧の配布。写真 / 布施恵

地域ボランティア1 地域ボランティアの 始まりと発展

証厳上人は 1997 年に地域ボランティアの概念を広め、慈濟ボランティアたちがそれぞれの居住地域に密着した支援を行うよう推し進めました。そして、2003 年には「合心、和氣、互愛、協力」という考えのもと、ボランティアを組織化しました。

1991 年の日本分会成立初期は、人数も少なかったため、活動業務や地域のお茶会などは全て分会の委員とボランティアたちで分担してお互いに協力して行いました。

訳 / 井田龍成 文 / 陳思道

大きな揺れと
大地から溢れる愛の心

一九九一年九月二二日に発生した台湾大地震では、愛の心を持つ多くの人々が慈濟を知り、ボランティアに参加しました。二〇〇〇年には第一回祈福感恩会、二〇〇一年には現在の場所へ移転、二〇〇五年には《父母恩重難報經》の演繹を行いました。上人は「善と親孝行は待つてはなりません」と説いて、多くの人々をボランティア活動に導きました。日本慈濟の委員の人数は、一九九八年の十八名から二〇〇六年には七十名となり、慈誠も十四名になりました。

二〇〇六年、ボランティアの増加に伴い、日本分会は地域で組み分けを行いました。一回目の組み分けでは九組に分け、東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、山梨、愛知、関西、九州・四国

となりました。各名称は第一組、第二組、と続き第九組でした。東京、神奈川、埼玉、千葉の組は各地域の支援活動の他に分会の当番や炊事など交代で行いました。

二〇〇八年、二年間の活動経験を経て、東京、神奈川、埼玉、千葉の組を再編して五組に分け、名称を南関東協力組、首都圏協力組、品川協力組、新宿協力組、神奈川協力組としました。当時各組では活動幹事や総務幹事など役割を分担しました。

■ 1 蒲田で台湾九二地震の為にボランティアが街道募金の写真 / 日本分会提供

■ 2 中央区の老人ホームで奉仕。写真 / 顔秀美

■ 3 神奈川区町田市の新芽奨学生とのふれあい。写真 / 林真子

■ 4 新宿区の都庁で街友に暖かいスープを配布。写真 / 慈涓

二〇一〇年、花蓮本部宗教處の指導のもと、日本分会の協力組を八つの協力組に再編しました。地理的観点から二つから三つの協力組を一つの互愛組とし、二つの互愛組を一つの和氣組としました。そして、南和氣と北和氣の二つを合わせて一つの合心組としました。

心を合わせ、互いに協力し合う

ボランティアの人数増減に合わせて、日本分会では二年に一度調整を行っています。ボランティア達の多くは電車を主な交通手段としているため、各組の人数の他に、交通の利便性を考え地理的な位置も考慮する必要があります。

「四合一」の組分け方法も同じく二年に一度調整を行っており、この十年間で安定して、調整幅も減りました。

二〇二二年現在、日本分会は





■ 1 群馬ボランティアの張秀民。写真 / 陳文絲

■ 2 群馬の親子キャンプ。写真 / 李翠華。

地域ボランティア2

その他のコミュニティの 縁起と早期発展

日本分會は東京を起点として展開され早くから、群馬、山梨、関西等に設立され、慈濟の種子は各地で同時に芽を出し、花を開いていきました。

訳 / 真鍋誠 文 / 張秀民 陳靜慧

日本分會を開設した当初は、ボランティアは非常に少なかったのですが、慈濟の資格を受證した委員が遠く近くに係わらず縁があれば色々な場所に出向き、茶会を開き慈濟を紹介しました。慈濟の地域でのボランティア活動の概念は、一九九七年に台湾から押し進められました。全てのボランティアは新しく編成され、そのボランティアは地域に恩返しをする心を持ち、近くの

一九九一年張秀民さんは、東京で開催された第一回日本分會の説明茶会に参加し、その後群馬に帰り、群馬で最初の慈濟会員になりました。それから毎週東京に赴き色々な活動に参加するようになりました。一九九四年同じ群馬に住む佐藤美江さんは張秀民さんに連絡をして本来台湾へ渡す善款を手渡しました、又台湾からもってきた證嚴上人のビデオテープとカセットテープを渡し、その後半田運美さんを紹介しました。ここに群馬地区での慈濟ボランティア活動の第一歩が踏み出される事になったのです。

地域に関心を持って寄り添い、地域の皆様と共に生きるこの概念がゆつくりと確実に海外にも広がっていきました。

群馬—張秀民



■ 6 埼玉川口市で夜回りをし、物資配布を行う。写真 / 陳雅琴

■ 7 オンラインで夜間読書会。写真 / 日本分會提供

■ 8 品川区の懇親会。写真 / 林真子



協力組があり、各組の特色や要望に合わせてお茶会、読書会（勉強会、街友支援、料理教室、各種支援活動など）を行って

「四合一」は、十名から二十名程のボランティアで一つの協力組を構成しており、日頃からお互いに協力して各地域で活動しています。そして、人数が必要な活動や支援がある場合はより多くの組で協力して行います。最も典型的な例としては、毎月二回行われる代々木公園の炊き出しです。一つの組だけでは人数不足のため「和気」単位で行います。ある協力組は炊事を担当し、別の協力組は事前準備を行い、他の協力組は炊き出し後の片付けなど分担し協力して行います。また、この支援活動は月曜日のため、参加人数が足りない場合はお互いに人数を補いながら支援しています。

二〇二〇年、新型コロナウイルスが世界に蔓延し、日本も影響を受けました。コロナ渦の中で、家を出て分會へ行つてボランティア活動することも困難になりました。このような時に、「四合一」組織の重要性が増しました。そして、本部指導のもと各地域で協力組単位でオンライン読書会を行い、互いに連絡を取り合い精進しました。コロナ渦で人と人との距離は遠くなったように見えますが、「四合一」の組織構成のもと、ボランティア達は互いに緊密に連絡を取っています。

地域分けは手段の一つですが、群衆に入り自分の手が届く範囲で支援を行い、善い因と善い縁を結びます。私たちは、さらに多くのご縁ある人々のご参加をお待ちしており、慈濟の大愛を日本の隅々まで広げられることを期待しています。



■ 新潟水害、西脇民雄さんは（右前）掃除活動に参加。写真 / 慈涓



■ ボランティアの西脇秋蘭（右）親睦会に参加。写真 / 慈涓複写



■ 1 ボランティアの黄碧霞（左 3）山梨のお茶会に参加。
写真 / 王騰衛
■ 2 中越地震、ボランティアの黄碧霞（右 2）は炊き出し活動に参加。写真 / 慈涓



半田運美さんは「佐藤さんからたくさんのかセットテープを渡されましたが、毎日それを聞くのが好きでした。日本にいる時は特に故郷台湾が恋しかったのです、特にテープから流れてくる言葉は台湾語です、上人様のお言葉を心を静かにして聴いて、多くの事を吸収する事が出来ました」と言っていました。

一九九五年姜桂花さんに寄り添った事で、高崎地区の多くの方がボランティア活動に参加し

山梨—黄碧霞

「三十年前の一九九一年台湾を設立。二〇〇二年以後定期的ではありませんが茶会と読書会を開催しており、加藤恵さんのレストランでよく茶会を催しています。その他、よく東京で開催される祈福感恩会にも参加し、定期的ではありませんが当地のバザー活動にも参加しています。二〇一二年からは毎月読書会、皆で一緒に学ぶ学習会の活動も開催しています。」

「三十年前の一九九一年台湾

で「静思語」の本を見つけ二冊買いました。その一冊を當時兵役に就いていた息子に送り、もう一冊は日本に持って帰りました、しかし今までそれを開いて読んだ事はありません。」山梨ボランティアの黄碧霞さんは慈済と早くから縁が有りました、しかしその当時は自分の生活のことを重要視せず、マージャンにのめり込んでいました。ある雨の日、外出する事が出来ません、そこで「静思語」の本を読む事にしました、そして一気に最後まで読みきりました、涙が溢れ長い間我を忘れて泣いていました。彼女は直ぐに花蓮に電話をしました。電話を受けた師父はすぐに日本分会の責任者謝富美さんの連絡先を教えてくださいました。当日連絡を取りました、謝さんは「今日、中華学校でバザーが開かれます、あなたも参加されてはどうですか」と黄さんに伝えて

くれました。

黄碧霞さんは中型車をチャーターして、山梨の多くの台湾の友達を乗せて、東京中華学校にやって来ました。そして献金するだけでなく、バザー品もたくさん購入しました。その後、毎月会員を連れて三軒茶屋の親睦会に参加する様になりました。

一九九三年多くのボランティアの人達を引き連れ花蓮にやって来ました、黄さんは非常に大きな感動を受けました、そして五十件の黄色のボランティアの制服、五十冊の「静思語」を購入し日本分会に寄付しました。その後色々な事情により直ぐには慈済の資格の受證はできませんでしたが、その時にボランティア活動に参加していた加藤恵さんと呉麗雲さんが山梨地区で最初に慈済の資格を受證した委員となりました。

一九九八年東京と山梨のボランティアの人達は聯合で呉麗雲さんが勤める老人ホームを訪ね

新潟—西脇秋蘭

ボランティアの西脇秋蘭さんは台湾からの「慈済月刊」を見て慈済日本分会の事を知りました、そして自分から謝富美さんに連絡をし、それ以後毎月ご主人から分会に献金をするようになり、毎回献金の領収書を受け取った後ご主人は秋蘭さんに「私は又献金しましたよ、嬉しいですか?」と聞きます。この御夫妻が新潟における最初

の慈済ボランティアです、一九九七年この御夫婦は花蓮に赴き慈済の資格を受證しました。

ボランティアの西脇秋蘭さんは台湾からの「慈済月刊」を見て慈済日本分会の事を知りました、そして自分から謝富美さんに連絡をし、それ以後毎月ご主人から分会に献金をするようになり、毎回献金の領収書を受け取った後ご主人は秋蘭さんに「私は又献金しましたよ、嬉しいですか?」と聞きます。この御夫妻が新潟における最初

「自分で良いと思った事は人に知らせる」この考え方、これが慈済と佛国土を繋げる縁となつて居るのです。数年前西脇さん御夫婦は台湾に戻ってから今まで台中でボランティア活動をしています。



■ 盧秀秀さん（左一）は名古屋で中華航空墜落一周年の祭典に参加。写真 / 慈涓複写



■ 会場では慰霊式が行われています。

名古屋―盧秀秀

現在七十九歳のボランティア
ア盧秀秀さんは五十数年前慈
済功德会を設立してまもなく
花蓮に赴き上人様に拝謁し、
上人様と同卓で食事をしまし
た、そして慈済の会員となり
ました。後に日本分会が設立
してまもなく分会の人が蘆さ
んと連絡を取りました。

一九九四年中華航空墜落事
故発生後、蘆さんは名古屋で
一番早く現場に駆けつけまし
た。二百余りの並べられた御
遺体を見た時の印象はとても
強烈で、今でも忘れる事はあ
りません。次の日、東京の慈
済に人達が駆けつけました、
不安な心持の中、仲間が傍に
いるので心を強く持つことが
出来ました。名古屋において
は、慈済の人が亡くなられた
方の家族に寄り添いました、
その家族百人前後の台湾人が
慈済を認め、慈済の会員とな

りました。それから二十年余
りの歲月が流れ、その多くは
台湾に帰って行きました。

今現在蘆さんは体調が思わ
しくなく、ボランティア活動
に参加できません、しかし日
本語を上手に話すことが出来
る娘の金媚湘さんが東京にい
ます、金媚湘さんは慈済の「眼
癌關懷」のボランティアです。
そしてこの善の縁を持続して
います。蘆秀秀さんは上人様
は偉大な人だと思っています。
上人様は何でも出来全世界に
平等な愛の心を持っており、
その事に蘆さんは非常に感動
しました。

関西―段淑華

関西ボランティアとの縁は
早くから有りました、一九九
一年当時大阪に住んでいた段
淑華さんの隣の人が慈済の会
員でした、毎年台湾から慈済
の委員が来て会費を受け取り

に来ていました、当時中国大
陸の華東地区の水害における
被害が甚大でした、隣の人は
段さんにこの水害に援助金と
して寄付していただけません
か？と私を訊ねてきました。
この事があって段さんは慈済
を知る事になり、隣の人は台
湾から戻ってきた時、上人様
の教えを録画したビデオテー
プ持ってきました。段さんは
それを見て大いに感動し、そ
の後段さんは花蓮に赴き一ヶ
月の慈済ボランティアとして
活動しました。

その頃、タイミングよくボ
ランティアの顔恵美が遺体安
置室の視察の為に日本に赴く
事となり段さんもそれに随行
する事となりました、そのよ
うな事があって大阪で第一回
のお茶会が開催されました。
その後謝富美さんにも連絡を
し、そして関西で初めての慈
済ボランティアとなりました。

一九九二年段さんは東京で



■ ボランティアの段淑華（二列目の左一）は地域の勉強会に付き添った。写真 / 慈涓複写

開催された成立二周年四大志業
説明会に参加して慈済の委員の
資格を受證しました。そして、
一九九四年四月名古屋での中華
航空墜落事故が発生しました、
この対応に全く経験の無いボラ
ンティア達は困難に恐れない精
神を持って事故現場に足を踏み
入れました。一九九五年阪神大
震災発生時、段淑華さんは阪神
地区のボランティア達を帯同し
て災害地区視察に向い被災した
当地の留学生に寄り添い慰め合
いました。

段淑華さんは花蓮に住んで
ボランティア活動をしていま
す、関西で愛の縁の芽は早くか
ら芽づいています。一九九九年
台湾で九二一大地震が発生しま
した、ある日段さんは施燕雪さ
んと陳慧珍さんから連絡を受け
まし。彼女達は台中方です、「九
二一災害時被災した家族は慈済
に色々と助けられました、慈済
に必ず献金させて下さい」と伝
えて来ました。この事が縁で二

人は慈済ボランティア活動に
参加する様になりました。

早期の関西ボランティアの
活動は自宅、公民館或いは色々
な施設をレンタルして行って
いました。二〇〇一年からあ
る地区で素食料理教室と慈済
を紹介する活動が開始されま
した。

二〇〇二年からは華僑会春
節祭の活動に参加する様にな
り、その活動は現在に至って
あります。同年第一回の祈福
感恩会が開催されています。

この年第一次街頭清掃活動も
行われ、初めての施設への関
心、老人ホームへの訪問等の
活動も開始しました。それに
伴いボランティアも増えてき
ました。自分の近くの地域か
ら外に向かっても行動を開始
し、二〇〇五年には身体障害
者機構「ふるふる工房」で障
害者と共に素食を作り共に素
食を食べました。二〇〇六年
豊中市の区民館をレンタルし

露店を設置し慈済を宣伝し地
区との交流を深めました。二
〇〇七年児童福祉施設「遥学
園」に赴き学園内の清掃に協
力をしました。二〇一〇年に
心霊道場となる大阪連絡所が
設立され、やっと関西ボラン
ティア達の家が出来たのです。

体は海外にあっても、早期
加入のボランティア達は電話
で連絡とり、上人様の教えに
カセットテープを用いて伝え、
又各地でお茶会を開く等地区
間のお互いどうしの連絡、救
援のネットワークを立ち上げ
ました。片や地域に根をはり
当地に恩返しをしています。
愛は共同の言葉です、愛が有
れば孤独ではありません、日
本各地に散らばっているボラ
ンティア達は一粒の善の種か
ら始まり、地区の奥まで足を
踏み入れます。一歩一歩足跡
を残します、それは一つから
無限に増えていきます。

南関東和気 コミュニティの近況

訳／御山凜 文／河村吉美



南関東和気コミュニティの特色は、一人一人が何事も恐れず、自分たちができることを最後までやり遂げる純粋無垢な心を持ち、行動をし、日本慈済支部の活動があれば、必ずサポートへ向かうことです。

う心を他人の親にも及ぼし、自分の子供を慈しむような心を他人の子供にも及ぼすの精神で、音楽を奏で、歌を共に歌い、温かい心で寄り添い、お年寄りに温かさやケアを届けました。

新宿区は支部の近くにあるので、毎回代々木の炊き出しの際には、天気や雨風に負けず、早朝からお米を洗い、温かいお弁当を用意し炊き出しへ向かい、常に全力を尽くしています。特にバザーの手伝いでは、手慣れだもで、熱意もあり支部の発展に貢献しています。先日支部でのお茶会では、ほとんどの方が出席しました。そこで悦びを共有し、絆もより一層深まりました。

品川区では支部のコミュニティエコ活動に尽力しそれに合わせ、酵素作りからエコリサイクル、物の使用期間を延ばすことで、生活の価値も上がります。また毎年一度代々木公園で開催している菜食展では、菜食を食べることへの関心を多くの方から集めています。

中央区の老人ホームケア活動は、「老吾老以及人之老、幼吾幼以及人之幼」（自分の親を敬

チームのこと）をサポートしていることに、みな心に感謝の思いがあり、その心が私たちを出

神奈川区慈済ボランティアは、平均年齢が七十歳以上にもかかわらず、心寛念純（心を広く、念を純粋に持つこと）で目的的地までの道のりや交通費も厭わず、誠敬（せいけい） 供養の気持ちでたびたび、遠くから香積（支部で料理を担当している

チームのこと）をサポートしていることに、みな心に感謝の思いがあり、その心が私たちを出

コミュニティに慈善と 人文を推し広める

南関東コミュニティは十年前から支部近くにある大久保地域センターで、菜食料理教室研修を広め、コミュニティボランティアも迎え、静思語を教えるだけではなくコミュニティボランティアに慈済の人文をより理解してもらえるように努めています。

ます。心温まる菜食での交流は、菜食を広める一番の近道です！
五年近くある新芽助学金プロジェクト（慈済の奨学金制度のこと）は、支部で企画始動後、コミュニティボランティアが引き継ぎ、身近にいる生活困窮者家庭の大学生をケアし、裕福な国の片隅にある命に、希望の光を灯し、学生が感謝の気持ちを心から思うことで、慈善活動に親しむことができます。福を知り、その福を大切にすることで、社会への恩返しと感謝の気持ちを理解し、一人一人が愛の心を誰かのために発揮するとき、それは社会のために福を造る原動力なのです！

私たちが一歩踏み出すのは、自分たちの一念である善の心をたぐり寄せ、慈済の「誠、正、信、実」と「合和互協」の精神で、命があるかぎり 上人について行き、同じ心、志で願かけをし、共に菩薩への道を歩んで行く願いがあるからです！



■ 1 南関東和気コミュニティの皆さん。
写真 / 陳文絲
■ 2 中央区の老人ホームで慰問活動。
写真 / 洪惠娟
■ 3 年に一度代々木公園で開催される「ベジフードフェスタ」に参加。
写真 / 池田浩一
■ 4 大久保地域センターで、菜食料理教室研修を広める。写真 / 日本分會提供
■ 5 横浜最初のボランティアである林靖娥さんは、台湾の友人の勧めで募金活動をし、海外から花蓮慈濟病院建設活動をサポートしました。1991 年日本支部の成立後、それに伴うようにボランティアになり、横浜地区で慈済を広め積極的に募金、愛を募ることに力を尽くしています。
写真 / 慈涓



北関東の地域活動

訳／張靜華 文／蘇美菁



■ 埼玉県のボランティアの秋元優実子氏（左 3）は、2005 年寄付金の領収証に記載された電話番号を見て、当時三軒茶屋にある慈済の事務所に連絡した。初めて隅田川周辺の路上生活者へ配給した野菜まんは彼女の工場で作った。その後、慈済日本支部がバザーを開催する際、いつも参加してくれる。写真／慈涓

ここ二年間、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、人々の心は不安になり、自粛期間が長引いて景気が低迷した結果、多くの人々の生活が困窮に陥った。北関東（大宮、川口を含む）に住んでいるボランティアは、話し合った上で周辺の地域で援助活動を始めた。

ボランティアの篠田恵氏と蘇美菁氏は、何回かの試行錯誤を経てから、二〇二一年四月に埼玉県川口駅周辺の地下道の路上生活者に、夜間に物資の配給活動を行った。路上生活者が、人込みを避けるために早朝に地下道を離れ人影がなくなった夜間に戻ってくることに合わせて、配給時間は午後十時半からとした。厳しい状況のなかで、少しでも気持ちを届けたいと思った。

コロナ禍での施設への懸念

以前から関わりがあった障害者支援施設「スマイル工房」は、自粛期間中はずっと外部からの訪問を断っていたが、慈済のボランティアの土方理恵氏がベジタリアン食を提供したいと電話で申し出た際、担当の方はとても喜んでくれて台所を利用させてくれた。六月二日、数名の慈済ボランティアはスマイル工房を訪ね食事を作ったほか、娯楽も提供して施設に通う障害者の方々と楽しい時間を過ごした。三週間後、ボランティアはお米を寄付し、三か月毎にベジタリアン食の提供など支援活動も継続している。

貧困児童に食事を提供している子供食堂にお米と油の寄付を行い、今後も食事の提供を計画している。また、家庭内暴力の

被害となっている児童や身体障害児或いは精神障害児を受け入れる施設へ、食糧品や衣服の寄付を九月から開始する予定がある。

北関東のボランティアはいつでも地球環境を守ることを日常生活に取り組んでいて、通勤や買い物の途中に路上のごみを拾う事を実践している。布施氏は孫と一緒に路上のごみを拾い、林勲氏は毎日自宅周辺の道を掃除している。

我々は、心身共に健康で、明師の下で仏法を学ぶことができて、とても幸せなことだと思っている。人間として生まれたことに感謝し、この身を尽くして佛道に勤修、精進し、より良い社会の為に自分の力を発揮するよう努力していくべきだ。



- 1「スマイル工房」でベジ食を提供し、その後一緒に踊りました。写真／李月鳳
- 2 川口市でコロナ禍でケア訪問。写真／蘇美菁
- 3 埼玉県川口駅周辺の地下道の路上生活者に、夜間の物資配給活動を行った。写真／陳雅琴
- 4 布施氏は孫と一緒に路上のごみを拾いました。写真／布施恵

群馬・山梨・関西

地域十数年における状況報告

慈濟日本支部のボランティア活動は、東京を中心として活動を展開しています。チームは南部と北部の関東和気チーム、それ以外に群馬、山梨、関西の三つの地域でも早い段階から、今日まで活動を続けています

訳／王譽葵・文／陳靜慧

群馬：古き町のある地域

群馬チームは立ち上げ時期が早く、今は主に六人の委員で活動しています。一九九七年から活動を始め、ボランティア間のお茶会や読書会を開催、二〇二〇年からは県内にある老人ホームでケア活動を続け、今に至ります。また二〇一二年までリサイクル、リユースの活動を行い、その活動で得た利益の半分を慈

済大愛テレビ局へ寄付、半分は群馬地区の活動に活用しました。

この十数年は地域奉仕に関わることに以外に、お亡くなりになった方への追悼式や告別式、貧困に陥る家族への長期的なケア、人文方面では日本在住の華僑コミュニティへ慈済を紹介し、大規模災害募金、震災復興活動、フリーマーケット活動、



■ 1 世界中の災害に対して、群馬ボランティアは街頭募金を行う。写真／日本分会提供
■ 2 山梨のお茶会交流で築く絆。写真／張秀民

仏教の教えにまつわる劇など、日本支部で様々な活動を行っています。

昨年は新型コロナウイルスの關係で老人ホームでの活動は中止となりましたが、地域ケアやボランティア間の交流を続け、また更なるメンバーの募集も行いました。

山梨：お茶会で愛が長く続く

山梨県のボランティアは主に笛吹市と甲府市に分かれており、現在十名の委員と一名の慈誠メンバーがいます。山梨地域のボランティアは長年、月一回の集まりを開催しており、日本支部の大きなイベントにも参加してきました。二〇一六年の熊本地震の時には、遠く離れていても災害救援に参加し、六月には災害救援の経験を共有するた

めに東京から十人以上のボランティアが山梨を訪れお茶会を行いました。

この二年間、メンバーの林素子さんが道場として自分の家を提供してくれました。コロナ禍、毎月の合同研修は中止になりましたが、ビーガンに関わる集会を開催したり、環境に優しく地球を愛するよう皆に呼びかけに来ました。

関西：慈善と人文の発展

関西地方は京都府、大阪府、滋賀県、兵庫県、奈良県、和歌山県、三重県からなり、現在、慈済委員は十二名、慈誠は二名です。

ボランティアの人数は少ないですが、誰もが積極的に参加し、重要な役割を担っています。緊急救援活動、お亡くなりになられたかたの追悼や送別式、受刑

者の慰問、施設の慰問、大規模災害救援活動など、必要があれば常に最善を尽くしてきました。また人文活動も多方面に亘り行い、環境保護や慈済基金会の推進、旧正月イベントへの参加や、手話ガイド、料理教室、手話教室なども長年続けて来ました。お経をベースにした手話や毎週のオンライン読書会グループも行っています。

二〇一一年の東日本大震災と二〇一六年の熊本地震の災害救援では、夜行バスや飛行機で現地へ向かい支援に参加しました。二〇一八年の西日本豪雨の時、関西のボランティアは災害救援と村人の慰めのために岡山に行きました。

二〇一四年には大阪西成区でホームレスの方の慰問を始め、街の奥深くまで入り込み、二〇一六年には五百人に物資を配給し、二〇一七年には定期的な炊



■ 1 大阪豊中文化祭で慈済を紹介する。写真／慈涓
■ 2 西成区でホームレスの方への物資配布。写真／孫素秋

断されることなく、愛は決して止まりませんでした！

さらに多くの県や都市で一粒の種から活動を始め、一步一步着実に歩を進め、段々と現地に深く根をおろし、コロナ後も慈済基金会の愛が芽生えることを願っています。愛のリレーを続け、地元の人々に伝えましょう。





靜思人文
JING SI CULTURE



解惑——證嚴法師答客問

解惑

解惑十書內容收錄證嚴上人針對各類疑問的解惑及開示，主題涵蓋：生老病死、家庭與人際關係、人生智慧與修養、教育與青少年、學佛、民間信仰、如何面對天災人禍，以及數十年來上人會見各界人士，及接受全球重要媒體之訪問等。同時，也完整說明慈濟功德會籌路藍縷的發展史、定位與組織運作。



靜思僧團 輯錄

■ 解惑——證嚴法師答客問 (一)
【生老病死篇】 定價：400元

生命有限，慧命永存，正固人生如燭，
更要惜時、惜因、惜緣，利益衆生。



歡迎至靜思書軒、靜思網路書軒、
HYREAD購買